

滿洲軍からも、海軍側も「一日も速かに旅順を屠るべし」と要望することが切であつた。
準備は成つた。二十八 榴弾砲も到來し、砲床の構築を了した。十月二十五日、乃木將軍は、
次の命令を下したのである。

第一師團ハ二十六日午後五時ヲ期シ、先ヅ松樹山前面ノ散兵壕ヲ占領シ、次デ砲撃ノ奏功ヲ待テ松樹山ヲ
占領スルコト。第九師團ハ二十六日午後五時ヲ期シ、二龍山前面ノ散兵壕ヲ占領シ、次デ砲撃ノ奏功ヲ待テ
直チニ二龍山ヲ占領スルコト。第十一師團ハ砲撃ノ奏功ヲ待テ直チニ東鷄冠山北東ノ砲臺ヲ占領スルコト。
三縦隊ノ各目標地點ニ對スル歩兵突撃ノ時期ハ、更ニ命令スベシ。
東鷄冠山、松樹山、二龍山、二〇三高地ニ對スル我ガ攻路ハ、慘憺タル苦心ノ後、已ニ何レモ敵前數十
米突ニ迫リツ、アルナリ。

二十六日から二十九日に涉る猛烈な砲兵戦に優勝し、三十日には歩兵の鋭い突撃となり、十一月
三日の天長節は、旅順の町で奉祝しようと云ふにあつたので、我が将卒の意氣は眞に冲天の概が
あつた。併し砲火は十分に敵を壓倒し、堡壘の破壊も効果著しきものあつたにかゝらず、松樹
山、二龍山に肉薄した突撃隊は、堡壘の外壕に於て阻止せられ、東鷄冠山に突撃したものは、中
腹の散兵壕を奪取し、砲臺内に突入して砲身に攀ぢ、萬歳を唱へるものもあり、東鷄冠山北堡壘
に向つたものは、外岸穹審の大半を占領し、更に突進したが、或は逆襲を受け、又は後援が續か

ず、惜哉、成功するに至らなかつた。

見よ、十月末——明治三十七年十月卅一日——までに我が二十八 榴弾の發射せられたものゝ
みでも、二龍山堡壘に一千三十發、松樹山堡壘に七百發、東鷄冠山砲臺に六百五十發、東鷄冠
山北堡壘に五百發であり、二龍山を完全に占領するまでには二千餘發を費してをる。如何に多くの
砲火が費されたか。この事實に就て考慮しても、攻圍軍の努力には些の遺憾だになく、文字通り最
善を盡した。かう云ふやうに攻撃のために夥しい國帑が日毎に計上せらると共に、肉弾も之に比
例して投ぜられた。否な、戰場に仆れ、又傷つくのみでなく、悪疫のために仆れるものが少くなか
つた。そして旅順を易く攻陥し能はぬので、當時の攻圍軍の首腦の苦衷は察すべきものがあつた
のである。

巨砲を用ひ、肉弾を投じて、堅岩とベトンをも以て構築した各堡壘は、依然として舊態を改めな
い。如何に此の旅順の要塞が容易なるものでなかつたかは、第七師團が駐營地を出發し、將に戰
地に向つて乗船しようとする際「旅順の攻圍戦に参加するものであることを知つた刹那、將卒共
に愕然として一語を發するものがなかつた事實に徴すべきであらう。勿論、これは決して戰爭を恐
れ、戰場に到るを嫌忌したのでなく、旅順の要塞戦の容易なるものでなかつたと云ふことを端的に

象徴化する挿話となすべきであらう。

◇「一舉直屠旅順城」

悪戦し、苦闘して明治三十七年十月は過ぎ、寒風荒む十一月となつたが、孜孜として攻圍軍の將卒は其の目的の達成に全精力を傾注し、著々として成果をも收めた。十七日には松樹山堡壘、二十日には二龍山堡壘の何れも外岸を爆發、占領し、進んで胸牆の登攀を敢行するために、その作業を開始したのである。

銳意して作業に努め、倦怠せぬが、岩石を穿つての作業は甚だ困難であり、進捗しなかつた。併し攻撃を緩ふることなく、目的の貫徹に向つて奔馳し、乃木將軍は、十一月二十六日、第三回の攻撃を行ひ、敵を撃滅すべく決意したが、その四日前の二十三日——乃木將軍の日記に依れば二十日夜——次の勅語を賜はつた。

旅順ノ要塞ハ敵ガ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ。其攻圍ノ容易ナラザル、固ヨリ怪シムニ足ラズ。

朕深ク汝等ノ勞苦ヲ察シ、日夜軫念ニ堪ヘズ。然レドモ、陸海軍ノ狀況ハ旅順攻圍ノ機ヲ緩フスルヲ得ザルモノアリ。斯ノ時に當リ第三軍總攻撃ノ舉アルヲ聞キ、其時機ヲ得タルヲ喜ビ、成

功ヲ望ムノ情甚ダ切ナリ。爾等將卒夫レ自愛、努力セヨ。

何たる優渥なる 歡旨であらう。六月以來、旅順の攻圍に銳意従ひつゝある將卒の勞苦を嘉せられて「其攻圍ノ容易ナラザル、固ヨリ怪シムニ足ラズ、朕深ク汝等ノ勞苦ヲ察シ」と仰せられてをるが、「然レドモ、陸海軍ノ狀況ハ旅順攻圍ノ機ヲ緩フスルヲ得ザルモノアリ」と宣はせられた。即ち十月に入つて皇軍は沙河附近の會戰に於て優勝し、更に北進の好き機會を捕へたが、戦線の著しく擴大すると共に、兵力の不足を感じた。殊に奉天に於ける敵軍は其の兵力を日一日と増加し、今迄は「豫定の退却」に次ぐに退却を以てしてゐた敵將クロバトキンも、轉じて攻勢を取り、決戦しようとする形勢が見えると同時に、バルチック艦隊も既にリバウを出港してをるので、速かに旅順を陥れることは、戦局の何れからも緊要であつたのである。

然るに容易に旅順は陥らぬ。些の愛惜する處なく犠牲を拂ひ、一切を盡しつゝあるが、その目的を未だ達成するに至らず、更に一段の奮闘、努力を續けなければならなかつた。こゝに於て乃木將軍は、勅語を直ちに全軍に傳ふると同時に、次のやうに閣下に參謀總長を経て奉答した。

旅順要塞攻撃ニ對シ 勅語ヲ忝フス、臣希典等 感激、恐懼ニ堪ヘズ。將卒一般 聖旨ヲ奉體シ、誓ツテ速カニ軍ノ任務を遂行セントトナ期ス。

この奉答文で乃木將軍の決意も明かにせられるが、同時に少からず將軍に衝動を與へたのは、勅

語を忝ふした十一月二十三日の翌日を以て打電せられたる山縣侯——當時の參謀總長、後の公爵——の意味深き一絶であつた。曰く、

百彈激雷天亦驚
精神到處固於鐵
一舉終屠旅順城

合圍半歲萬屍橫

含雪

山縣侯は乃木將軍の大先輩であり、青年の頃から實縁が浅くない。そして侯は軍國の參謀總長であり、日夜旅順の陥落を待つてをる。皇軍更に北進して露軍未だ攻勢に轉ぜざるに先立ち、大決戦を敢行しようとするには、乃木軍の北上に待たねばならぬ。旅順の陥落は全く夢寐の裡にも念頭を去らなかつたであらう。この詩が電報で第三軍の司令部に到着した時、「暗號であらう」と云ふので、いろ／＼と翻譯に努めたにかゝはらず、その意味を明かにすることが出来ないで、受持ちの幕僚から此のことを率直に司令官の乃木將軍に語つた。處が將軍は、

「フム、それは詩であらう。その儘讀んで見い」

と自ら鉛筆を執つて書下し、頗る緊張して結句の「一舉終屠旅順城」を繰返しつゝあつたが、聊か微笑を帯びて「一舉終に屠る旅順の城ではなく、一舉直に屠れ旅順の城ぢやらう」と獨語したと云ふ。勅語を賜はり、又更に山縣侯の激勵があつたので、左なきだに勇躍しつゝある第三軍の將

兵は、その目的を貫くために死力を盡し、任務を十二分に遂行することになつた。悲壯の大決心は全軍に漲つたのである。

明治三十七年十一月二十四日、乃木將軍は第四回總攻撃の命令を發したが、一般方略の概要は次のやうなものであつた。

- 一、軍ハ二十六日ヲ以テ望臺一帶ノ高地ヲ奪取スル目的ヲ以テ總攻撃ヲ再興ス。
- 第一、第九、第十一師團ハ、各攻撃地區ニ從ヒ、午後一時ヲ期シ、松樹山、二龍山、東鷄冠山北砲臺及び二龍山以東、一戸保壘ノ前面ニ至ル舊圍壁ニ向ヒ突撃ヲ實行シ、次デ協同シテ松樹山砲臺南方高地ヨリ毅後軍副營北方高地ヲ經テ東鷄冠山砲臺ニ亙ルノ線ニ進出シ、該線ヲ占領ス。又砲兵旅團ハ主トシテ松樹山及び二龍山方面ノ攻撃ヲ援助ス。
- 二、攻城砲兵ハ此攻撃ヲ援助スル目的ヲ以テ砲撃ヲ行フ。各砲臺ハ二十六日午前七時迄ニ射撃準備ヲ完成シ、命ヲ待ツベシ。

この命令の下に各隊は、眞に死力を盡して攻撃に努めたが、猛烈な我が力攻にも、敵は頑強に防いで一步も退かうとせぬ。豫期の目的半だも達成し得ない。成程、旅順は東洋一の堅塞であり、クロバトキン將軍が「如何なる敵を引受けても、斷じて三年は支へることが出来るであらう」と豪語

したことが確かに首肯せられるのであつた。併し如何なる犠牲を拂つても、これを攻圍軍は一日も速かに攻略せねばならぬので、豫て計畫してあつた特別の方略を實施することになつた。陸軍少將中村覺(後の大將)を指揮官とした特別豫備隊——白禰を十字に綾どつた三千八十三名の將卒からなる決死隊——は、十一月二十六日午後八時四十分、肅々として目的地に到達し、その大任務を遂行することになつた。

出發前に中村少將は決死隊の將卒に「我が特別支隊ノ目的ハ、旅順ノ要塞ヲ中斷スルニアリ。一人タリトモ、決シテ生還ヲ期スベカラズ。余斃レナバ、渡邊大佐(水哉)代リテ指揮スベシ。大佐ニシテ復斃レナバ、大久保中佐(直道)之ニ代ル可シ。各級幹部ハ順次ニ代ルベキモノヲ豫定シ置ク可シ。此襲撃ハ銃劍ヲ主トス可シ。第一著ノ地歩ヲ占領スル迄ハ、敵ノ猛射ヲ受クルモ、一發モ應射ス可ラズ。故ナク後方ニ止マリ、又は隊伍を離レ、若クハ退却スルモノアラバ、之ヲ斬殺ス可シ」と嚴かに訓示したが、乃木將軍も集合所に臨み、陣中に於て愛用してゐた虎の皮を中村少將に贈り且つ生還を期せざる勇士に、

今ヤ陸ニハ敵軍ノ大増加アリ、海ニハバルチック艦隊ノ廻航遠キニアラズ。國家ノ安危ハ、我が攻圍軍ノ成否ニ因リテ決セラレントス。此時ニ當リ、特別豫備隊ノ壯舉ヲ敢行ス。予ハ將ニ死地に就カントスル當隊に對シ、囑望ノ切實ナルモノアルヲ禁ゼズ。諸子ガ一死君國ニ殉ズベキハ

實ニ今日ニ在焉。希クハ努力セヨ。

と激勵し、決死の突撃隊は出發した。そして各方面と呼應し、不安内の、險惡なる地形を辿り、頑強なる鐵條網を乗り越え、漸く敵前に達して突撃を強行したが、敵は強力の探照燈を利用して我が勇士の所在を鮮かに照破し、三面から集射を加へるので、終に進退に窮し、死傷するもの大半、指揮官の中村少將も亦重傷した。

成果を甚だ注意してをつた軍の首脳は、「不成功」と聞いて暗然たらざるを得なかつた。作戰主任の參謀白井中佐(二郎、後の中將)は、攻城山にあつて、電話で其の報告を受けてゐたが、夜は次第に更け、寒さは酷烈である。中佐の耳に「ウム、白井か、それなら儂が出る」と中村少將の誰かに語つてをるのが明了に聞え、續いて何人か

「只今中村少將が御出になります」

と悲壯に告げれば、聽てズル／＼と歩行に苦むらしい少將が膝行つて電話に近づく氣配がする。そして沈痛な聲で現狀を語り、

「……この儘夜があげれば、全滅の外はない」

と結ぶのであつた。斯くして悲壯な白禰隊の負傷者と生存せる者は、夜陰を以て退却したが、倒れた人々の屍を開城の頃まで收容し得なかつたやうに、この方面では接戦、更に接戦しても、「一舉

直に屠れ旅順の城！」たることが出来なかつたのである。

◇主將の陣中日記

明治三十七年十一月中の旅順の攻圍戦は「悲壯」そのものであつたが、敵は一日は日一日と壓迫されてしまつた。そして隨處に赤十字の大旗を樹て、我軍の注ぐ彈雨を避け、安全を保つ猾策に出でもしたが、皇軍は文字通り最善を盡して目的の達成に邁往した。攻圍軍が如何に努めたか。乃木將軍の當時に於ける日記は、淡々たる中にも、猶ほ血涙の滲むものがある。見よ、次の日記を。讀め、この不朽の大文字を！

明治三十七年十一月一日 好

朝、黒井山ニ登リ、同氏ニ戰況ヲ告ゲ、黄金山射撃ヲ見ル。午時前豊嶋山ニ登ル。豊嶋、落合、榑原ト午食。參謀長午後登山。安原大尉十一師團ヲ歸リ報告ヲ聞ク、四時半山ヲ下ル。夜靜穩。○集作方來書、○渡邊壽大尉湯池定基の防寒足袋ヲ受取ル。

同 二日 好晴

午前十一時方三回旅順ニ大爆裂アリ。齋藤少佐第十一師團ヲ歸ル。報告ヲ聞。○午後三時、米國少佐外二名ニ面會ス。友安少將ノ副官書狀持參、保典ノ事ナリ。山岡松樹山、大庭、磯村大孤山行キ。池田大佐轉職

暇乞ニ來ル。○渡邊大尉ニ托シ、金貳十圓ヲ田中中佐ニ送ル。朝、葡萄酒二瓶ヲ海鼠山中川中ニ贈ル。

同 三日 好晴 天長節

午前十一時半一同祝賀ヲ表ス。十二時萬歳ヲ唱へ、君ケ代表奏樂、祝盃ヲ舉グ。午食後兼松ト二騎ニテ惣隊ニ角力ヲ見ル。西山中佐等ト朝久野少佐ノ幕ト渡邊小太郎少佐ノ幕ニ盃ヲ舉ゲ、第九師團司令部ニ師團長ニ現況ヲ質問シ、又第十一師團ニ至ル。前田少將アリ少話。歸路、鞠家屯二十八珊ノ破損ヲ見テ歸ル。參謀長外國武官ヲ訪問ス。○本日正午海軍砲擊、旅順出火ス。○終夜靜穩ナリ。○友安少將來書。○佐々木伯時局談ヲ讀ム(榑原大佐贈)。留守方來書(若葉主計持參)。

同 四日 好晴

本日各參謀長、榑原大佐、佐藤大佐ヲ集メ、參謀長ト會議セシム、午食ヲ共ニス。○各外國人方昨サンバソフ贈ル答禮書來ル。○留守宅方菓子品々送リ來ル。○本日剪髮入浴。

同 五日 曉來大風

朝、登山。後、英國新聞記者、畫師、、、告別來訪。○本日後四時、韓國勅使權重顯來著、面會後夜食ヲ共ニス。隨行參領趙性根。○岩村、落合、奈良ニ菓子ヲ贈ル。○岩村羊羹、柿到來、幕僚ニ分配ス。日夕鮫島來ル。次長來電持參、今後作戰意見ノ事ナリ。工事不進抄。

同 六日 好晴

朝、權重顯一行豊嶋山ニ登リ、王家甸二十八砲臺ヲ見ル、河西嚮導ス。本日歸還、大砲彈二ツ韓帝ニ献上

ス。六時出發。本日參謀九十一高地ニ行ク。○山岡二龍山ニ、井上松樹山ニ行ク。夜、報告ヲ開ク。○朝、韓使ヲ訪、答禮ス。○濱口獸醫正來訪。

同 七日 好晴

山岡盤龍山ニ、岩村二龍山ニ、又白井、磯村龍山ニ行ク。○橋本ノミヲ連登山、豐嶋ト二龍山觀測所ノ事ヲ談ズ。豐嶋陣地偵察ニ行ク。○午時歸ル。英國新聞記者ヨリ明日招待辭ス。參謀長、齊藤ト大孤山行キ。○韓皇ノ煙艸分配。○石本來ル。草場謹三郎氏方カラスミ一箱、ウニ貳ツ到來。○遠江國磐田郡二俣町渥美ヒサ子ヨリ新聞及端書到來。

同 八日 好晴

朝、井上參謀、兼松、橋本ヲ連レ、火石岑子ヲ經テ水師營中村旅團長ノ幕舎ニ到ル。同行歩第二聯隊、工第一大隊、松樹山麓ノ幕ニ到リ、井上及工兵中隊長ト登山シ歸ル。中村同行、C砲臺下ニ午食。第二聯隊ノ兵、露器ニテ作りタル箸ヲ交換シ、中隊長ニ渡ス。第一ノ鈴木參謀來ル。此ニ中村ニ別レ、又隈部ノ幕ニ茶ヲ喫シ歸ル。○國司少佐兒玉大將ノ書狀持參、傳言アリ。○夜食時海軍砲陣地ノ件ニ付參謀長ト論ズ。○夜、書ヲ認メ兒玉ニ答フ。○本日英人天長節ニ付シヤパンヲ贈ル。○本日工兵第三中隊北方方來著。

同 九日 好晴

岡野少佐北方ニ歸ル。書ヲ兒玉大將ニ托ス。午後、橋本少尉ノミト第九師團ニ到リ、大島中將 同行、歩シテ平佐旅團長ノ處ニ到リ菓子ヲ贈リ(カキモチ、ウニ)、服部聯隊長ニ菓子、ウニヲ贈ル。二龍山斜面ニ登リ大島ト別、歸路一戸少將ヲ訪ヒ、途ニ又大島中將ト會シ、又惣予備隊西山中佐ヲ訪テ歸ル。

同 十日 曇、午後好晴

朝、磯村參謀、橋本少尉ト第一師團ニ到リ、歩シテ第一旅團長馬場少將ヲ訪ヒ、菓子ヲ贈リ(熨斗梅)共ニ海鼠山ニ登リ、右翼ヨリ巡視、寺田中佐嚮導ス。倉島大尉(註)ノ幕ニ少休、觀測ニ至リ見ル。寺田中佐ノ本部ニ馬場少將ト會シ、溫飧ノ饗ヲ受ク。左ニ至リ、馬場ト歸ル。山本少將ノ幕ヲ拜ス。第一師團ニ到リ、松村中將ト小話、騎シテ歸ル。途ニ左家屯ニ外國武官ヲ訪、昨英人天長節ノ案内ヲ謝シテ歸ル、已ニ夜。大庭中佐ニ龍山ニ登リ、石ヲ採リ歸ル、醉談ス。○筑土海軍大尉東郷大將ノ書狀持參。
〔註〕 倉島大尉、名は富次郎、後の少將。當時は歩兵第一聯隊第九中隊長、曩に金州に於て重傷を負ひ、陣没した乃木勝典の所屬中隊長であつたのである。

同 十一日 晴

朝、橋本ト豐嶋山ニ登ル。射撃ヲ見ル。ギリヤク射撃ヲ行フ、老鍊山ニ隱ル。一時歸ル。伊集院海軍大尉旅順寫景ニ書ヲ需ム。地理不レ及ニ人和ト書ス。夜食シヤンパンヲ飲ム、誕辰ノ故ナリ。夜、銃聲譁シ。○大浦遞信大臣ヨリウイスキ小箱到來。石黒男、河野奈良知事、横堀三子方來書。

同 十二日 曇、霧

本日砲兵司令官、各參謀長會議、午食ヲ共ニス。留守宅及上田中將方來書。○大阪東末吉橋二丁目森正則氏方勸降意見書到來。○寶積寺驛長方惣代シテ新聞送り來ル。○大谷光瑞伯方來書。○第七師團ヲ當軍ニ

配屬セラル。

同 十三日 曇、大風

朝、六時白井中佐ヲ總司令部ニ遣ル。山岡參橋ト小孤山ニ登ル。武内少將ヲ訪、小話。朝、出掛ニ榊原工兵部長ヲ訪フ、午時歸。食後榊原大佐來リ意見ヲ開陳ス。參謀長ト聽ク。○今曉四時二龍山敵襲アリ、擊退ス。

同 十四日 晴後曇、大風(北)

朝、第九師團長ヨリ請求出頭、十時方面會、感狀ノ事ナリ。午食ヲ共ニス。○細谷少將轉任ノ報アリ、出電ス。○白井中佐方來電。○井上參謀北砲巡視、夜歸。

同 十五日 曉來風雪

本日十時方工兵部長ヲ加へ、參謀會議ヲ聽ク。夜、總司令部方長電アリ、攻撃ノ催促大旨。○集作方來書。○朝、井上ノ報告ヲ聞ク。○十八珊泊擊砲試驗。

同 十六日 暴風、稍靜、朝堅氷アリ

朝、工兵部長ヲ呼ブ。部長二龍山ニ至ル、頭痛ノ爲メ就寢。日夕秦野氏來診。○前田少將方來書、意見具申、即答。○夜ニ入工兵部長歸、報詳細ヲ見ル。

同 十七日 好晴

朝、秦野氏來診。○本日松樹山外壕爆破、午後參謀長登山。○山形縣羽前國東村山郡高樺村岡崎彌平治氏方來書、殿斗梅箱贈來。

同 十八日 好晴

本日各師團長、豊嶋、永田兩少將ヲ召集シテ現今内外ノ要件ヲ示シ、今後攻撃ノ要件ヲ談示シ、午食ヲ共ニシ、日夕ニ至ル。

同 十九日 好晴

朝、岩村中佐來リ、聯隊艦隊參謀土屋中佐東郷大將ノ書狀持參ノ報アリ。參謀長ト待ツ。午後着。夜、岩村、土屋兩中佐ト會食。朝、第七師團參謀蟻坂少佐來着。又稻垣騎兵少佐英國行ノ途次來訪。同氏藥膏、馬具類買入レヲ依托ス。有賀博士山雞二羽持參。

同 廿日 好晴、霰アリ

午前九時ヨリ登山、中村少將ヲ山上ニ呼ブ。參謀長ト共ニ突擊計畫ニ付談合ス。齋藤第十一參謀長モ來ル。午食ヲ共ニス。○本日十時二龍山外壕爆破ヲ行、良好。吉田旅團長、井上勝ト登山、四時下山。英國新聞記者ノ宿所ニ茶ヲ飲ム、兵卒ニ接待ノ建札アルニヨル、安原通辯ス、井上子爵方酒二種、カキモチ、吉田方酒ノ贈アリ。○保典ヨリ來書。○五時半ヨリ二龍山開戰。殆ンド夜ヲ徹ス。

同 廿一日 好晴

○參謀長會議。○午後第七師團長、齋藤旅團長等來着。井上子爵、土屋中佐此瀛車ニテ歸ル。東郷大將ニ山雞二羽ヲ贈ル。○參謀長會議夜ニ入ル。○保典へ勝典ノ衣、湯地ノ皮足袋ヲ送ル。○留守ニ送書ス。毛利子爵父子、集作方來書。

同 廿二日 曉來風、雪降ル、日出晴

早朝、第七師團長、兩旅團長ノ宿處ヲ訪フ。午前土屋中將來ル、攻撃計畫ノ事ナリ。午食ヲ共ニス。午時方十五珥彈ニテ旅順大火アリ。集作方來書、元敏公歌二首入り。○宮城縣互理郡逢隈村鹿嶋松原錦吾氏來書、歌アリ。留守宅方來書。夜九時勅語ヲ賜フ、奉答。○齋藤少佐間諜報告ヲ聞ク。

同 廿三日 好晴

朝、齋藤少將、大迫中將來ル。中村少將ヲ呼ビ、任務ヲ命ズ、午食ヲ共ニス。福嶋少將來ル、同斷。摺澤少將及池田大佐ヨリ來書。旅順行キ郵便來着。

同 廿四日 好晴、有霞

午前、大迫中將來リ、福島少將ト第九、第十一師團行キ。午後、豐嶋山ニ登ル。○夜 山縣元帥方詩アリ(電報) 百彈激雷天爲驚。合圍半歲萬屍橫。精神所到堅於鐵、一舉遂屠旅順城。林鍊作方來書。○本日全身浴ヲナス。

同 廿五日 曇

朝、大迫中將、齋藤少佐來ル。各師團攻撃命令ヲ讀ミ、午後、第十一師團、第九師團ニ至リ、師團長ト談ズ。○參謀長臥蓐。午後大風。○夜、滿ちらうヲ喰フ。

同 廿六日

朝方豐嶋山ニ登ル、一泊。

同 廿七日

日夕、二〇三攻撃ヲ第一師團ニ命ズ。

乃木將軍の日記帖は何處の店にでも賣捌かれてをるやうな模造革の表紙の附いた小形の縦罫入りのものであるが、第一頁に「NOGI」と青鉛筆で自署し、本文は黒の鉛筆を以て記入してあり、各日の記事終つてから二三行か、五六行必ず餘白が残されてをる。そして十一月の日記は、こゝに掲げたやうに、二十七日までしかない。十二月一日に至るまでに五頁——一頁七行——の餘白が残されてゐることから推測すれば、後に記入する考へであつたものと思料されるが、この三日間は軍務が殊に多忙であつたので、日記を附ける餘裕もなかつたのであらう。明治三十七年十一月二十七日から十二月五日に至る期間に於ては、旅順の攻圍戰に特記せねばならぬ多くのことがあつたのであるから……。

「必ず攻略せねばならぬ！」と大なる決心の下に著手した陸正面の攻撃——第三回の痛烈な總攻撃——は、遺憾ながら其の目的を達成する能はず、悲壯な白鵞隊の快擧も不成功であつたがために

正面の攻撃は一時之を中止と決し、こゝに二〇三高地の攻略に最善を盡すことになつた。

明治三十七年十一月二十七日を以て乃木將軍は二〇三高地の力攻を嚴かに命令したのであるが、如何なる堅い防備があつても、争で攻略し得ぬ道理があらう——と我が第一師團の健兒等は、友安少將（治延、後の中將）の後備歩兵第一旅團を右翼に、六十餘門の砲火に援護され、猛然として突撃を試み、二十八日の夜半迄には占領し、全軍の間に「二〇三落つ」の快報が傳へられたにもかゝらず、間もなく執拗な敵の逆襲を受けて奪還せられてしまつた。……と云ふ悲報に接し、失望は攻圍軍に搖曳したが、乃木將軍は大迫中將（尙敏、後の大將）に第七師團の精銳と曩に攻撃に當つた第一師團の諸部隊とを指揮して攻略に従はしめた。死力を盡して突撃する日本軍の猛威には流石に敵も辟易したのであらう。三十日には山頂を終に放棄したが、間髪を容れず、逆襲して再び奪還してしまつたのである。

二〇三高地は、我軍も文字通り死力を盡して攻略に努めたが、敵も頑強に守つて容易に退かなかつた。と云ふのは——旅順の死命が此の小山にかゝつてゐたからである。開戦以來、旅順口にあつた露國の海軍及び陸軍は、殆んど犬猿も音ならざる間柄で、陸軍側が海軍を厄介者のやうに取扱へば、海軍は陸軍側を惡罵すると云ふやうに、兩者の間は圓滑を缺き、反目の極にあつたが、皇軍

のために日一日と壓迫せられ、終に「二〇三高地危し」となつてからは、今まで陸軍を罵り、白眼してゐた海軍側も、漸く陸軍を援け、快く一致して二〇三高地を守ることになつた。當時、旅順に在つたレンガード少尉の日記にも、

其頃二〇三高地で戦死するものは多かつた。自分は屢々山下より砲臺に向けて援兵を送るのを目撃した。毎日、毎日新しい兵士が登山したが、それは殆んど水兵である。自分は之を目撃する毎に胸が一杯になつた。併し彼等は皆な如何にも嬉しうな顔付をしてゐるにもかゝらず、何處となく、沈んで、足取も何となしにとぼくしてゐた。即ち一見したのみでも甚だ疲勞してゐることが分る。この補充兵の中に生還するものが何人あるであらう。今こそ全中隊揃つて行くが、夜には如何になるであらう？ 朝登つた全中隊も、夕方には唯だ一人も残つてゐない。そして夕方には、又も新手中隊が登山すると云ふ状態で、忽ち生死の境をわかつたのである。

と云ふやうな一節がある。この水兵の中には未だ十七、八になつたのみの少年もあつたと云ふ。彼等は唯だ「祖國のために、祖國のために！」と喜んで戰場に行き、そこに悔恨もなければ、怨嗟もなかつたのであらう。

かう云ふやうに反目の極にあつた露國の陸軍及び海軍が今や死力を盡し、一致して二〇三高地を守り、四圍の敵の砲臺からは眞に彈雨を注いで我軍の突撃を巧に阻止する。肉弾に次ぐに肉弾を以

てしても、猶ほ確實に其の山嶺を我が掌裡に收めることが出来ぬ。全く遺憾に堪へぬが、如何ともなし能はぬのである。併し一日も早く占領せねばならぬ事情の下にあるので、我軍は毫も損害を顧みることなく猛進する。見よ、各處の我が陣地から二〇三高地に向つて集中せられる砲火を。二十八珊の巨弾が敵の堡壘に命中し、轟て炸裂する時、鐵板、レール、木材、土砂は、そこに死守してをる敵の將卒と共に微塵になつて飛ぶ。飛べば健氣にも新しい將卒が代つて死守し、我が突撃を支へる。當時の赤城艦長江口中佐（麟六、後の中將）の觀戰記の一節に「……味方軍が二〇三の中腹にだにの群りついたやうに見える。鳩灣の鴨湖嘴砲臺と西太陽溝の北砲臺が我軍を射つてをる」云々とあるが、全くだにのやうに我軍は二〇三高地の中腹に群つて肉薄したのである。

今、旅順を訪ひ、往年、攻撃中に乃木將軍の督戦しつゝあつた一六四高地即ち高崎山の頂上に立ち、二〇三高地を遙かに遠望するならば、険しい要害であることが點頭かれるが、殊に我軍の向つた背面は頗る急峻であるために、如何にだにのやうに中腹に群りついても、猛烈に敵の砲臺から狙撃せられたであらうことが想像せられる。そして我軍が頻りに危険を冒して山嶺に近づいても、急峻なるがゆゑに登ることが困難であり、頂上にゐる敵は待構へてゐて射つ。鬼神も猶ほ斯様な戦ひには屏息せざるを得なかつたであらう。併し一日も速かに攻略せねばならぬので、我が將卒は進んで死地に入つた。

◇ 保典も亦陣歿す

「二〇三落つ」の快報に次いで「奪還された」と云ふ悲報は到る。乃木將軍の十一月の日記が二十七日までしか記してなく、二十八日から三十日までの三ヶ日間を缺いでをるのは、如何に此の方面の攻撃が緊張し切つたものであつたかを象徴して餘りあるものであらう。確實に占領する日が翹望せられたのである。

何故に二〇三高地の占領が待たれたか。勿論、海軍側からの切實なる要望があつた。この高地を一日も早く奪取し、そこに觀測所を設置し、間接射撃によつて港内に潜む敵艦を悉く殲滅し、バルチック艦隊に對する準備をせねばならなかつたからでもあるが、海軍側の要望に劣らず、速かに旅順を取るべし」と強く求めたのは、大本營であり、又更に滿洲軍であつた。乃木將軍の十一月の日記に依れば、七日に「次長來電、持參、今後作戰意見ノ事ナリ」とあるのは、時の參謀次長岡少將（外史、後の中將）が山縣侯の意を傳へたものであらう。その次の「工事不進捗」の五文字は、吾の胸を力強く打つ。又十三日に「……白井中佐ヲ總司令部ニ遣ル」とあるが、白井參謀は第三軍の作戰主任であつたので、滿洲軍の總司令部に目下の實況を具に説明せしめ、又更に新しく作戰の打合せもあつたのであらう。そして十四日には「……白井中佐方來電」となり、翌十五日には「……

總司令官の長電アリ、攻撃ノ催促大旨」とある。

既に繰返して記したやうに、敵帥クロバトキンが未だ攻勢に轉ぜざる以前に其の機先を制し、積極的に撃破する軍略上からも、滿洲軍は乃木軍の北上を待つてゐた。而して「一日も速かに攻略せよ」と矢の催促である。こゝに於て「一日も速かに攻略するから何とかして彈藥を送れ」と要求すれば「……彈藥は次の會戰の爲めに一發でも多く必要だから第三軍は強襲を以て旅順を取れ」といふ。乃木將軍は自ら第一線を巡視して將卒を勵ますと同時に、日記の語るやうに幕僚、師團長を召致して攻略のことを熟議し、最善を盡して倦怠する處がない。そして乃木軍の首脳でも「十一月中に必ず旅順を取る」と總司令部に誓ひ、死力を傾けて力戦したのである。

「十一月中に必ず旅順を取る」と誓つたにかゝらず、依然として其の結果が不十分であり、期待に副ふものが多分ないので、煙臺に滞陣中であつた兒玉大將——源太郎、滿洲軍の總參謀長——は、又復自ら旅順に向つた。滿洲軍から御目付役として福島少將（安正、後の大將）が派遣せられてゐるのに、總參謀長の旅順行！當時に於ける緊張さが宛に想像せられる。局外者の村度を許さぬものがあつたのである。

汽車に依つて南下し、金州に著いた兒玉大將に「二〇三が落ちました」と云ふ電話が齎され、長嶺子に到着した時は「奪還された」との報があつた。出迎へた大庭中佐（二郎、後の大將）に「二

〇三を取返されたさうだな」と問はれるので、中佐が「ハイ」と答へれば、大將は「困るぢやないか」と詰られるやうであつた。氣鋭の大庭氏が「戰爭のことですから取つたり、取返されたり致します」と力ある言葉で答へた。蓋し「勝敗は兵家の常、今に屹度とつて御覽に入れます。第三軍の意氣は誠に豪壯ですから御心配御無用、各師團は善く戦ひます」との意味を言外に強くひゞかせたので、大將も謹嚴な顔色で黙し、又詰らなかつたと云ふ。兒玉大將は十二月一日から柳樹房にも起臥し、高崎山にも野營し、二〇三高地背面の塹壕の中をも往復して督戦したのである。

乃木將軍と兒玉大將とが二〇三高地の攻撃を絶えず督勵してゐた高崎山の頂上には、當年を偲ぶ石柱が建てられ、その表に乃木將軍は「我軍主力據此、以拔二爾靈山壘」と誌してをるが、歩を一轉すれば、左に廢寺があり、右は谷間になつて、そこには今や雜木と松とが生茂つてをる。併し二〇三の攻撃の際には、一個師團以上の將卒がテントを張つて滞陣してゐたと云ふ。「この狭い谷間に……？」と疑問も挿まれるが、中腹には猶ほ乃木、兒玉の兩將軍が一枚の毛布にくるまつて僅かに一睡したと傳へられる穴居の跡もあれば、山から亦山へ通ふた塹壕を偲ぶいろ／＼のものもあるのである。

かう云ふやうに乃木、兒玉の兩將軍が苦心し、督勵したがために、死守して退かうとしなかつた執拗の敵も、明治三十七年十二月五日午前十時二十分、我軍のために二〇三高地を全く占領せら

れてしまつた。乃木將軍の日記にも「十二月五日、朝々二〇三砲撃、九時方齋藤支隊前進、目的ヲ達ス」とあるが、この日に二〇三高地は陥落した。そして旅順の我が掌裡に收められるのも亦終に時の問題となつたのである。

二〇三高地は陥落した！ 二〇三高地は陥落したが、この攻撃中に乃木將軍の第二子保典は、終に陣歿してしまつた。歩兵第十五聯隊小隊長として、明治三十七年三月十九日、征途に上つた保典は、兄の勝典が金州に於て戦死した後、第一師團の衛兵長に轉任し、又更に後備歩兵第一旅團副官となり、友安少將の下に二〇三の攻略に従つたが、十一月三十日、老鐵山から飛來した砲弾が地下に設けてあつた旅團司令部の審室に命中し、司令部員の多數が死傷し、旅團長と副官とは恙なきをえたが、急速に司令部員を補充する必要上から友安少將は、揮下の第二十八聯隊長の村上大佐に頻りに人員の派遣を命じたが、時は攻撃の最高頂であり、電話も通ぜず、使者を出さうにも副官の外にゐない。そこで保典を其の特使たらしめたのである。

然るに要件は果され、要求した司令部員は充填せられたが、特使として出た保典が歸らぬので、探させれば、敵弾のために前額部を打貫かれて戦死してをつた。正確なことは明かでないが、保典の仆れたのは、その日の午後四時頃であつたらしいと云ふ。三十日の夜晩く、軍司令部から第一師團に派遣せられてゐた參謀の齋藤少佐（季次郎、後の中將）から其日の戦況を柳極房の白井中佐に詳しく報告した序に、

「……詳しいことは分らぬが、保典さんがやられたらしい」

との電話であつた。時は夜半、であつたと云ふよりも、寧ろ翌日の午前零時か、一時頃であつたらう。報告を受けた白井中佐は、即刻、乃木將軍の部屋に行つた。その足音に氣づいたものであらう、將軍の室がバツとあかるくなり、中佐が入らうとする刹那、微かな蠟燭の光がゆらめき、駭り頭部に結んでゐた鉢巻を取りつゝある將軍の姿が判然と映じた。例のやうに快活に戦況を報告した白井中佐は、

「……時に保典さんが戦死されたらしいとの報告がありました」

と淡く附加した。併し「保典さんが戦死されたらしい……」と聞いても、將軍は全く平常と變つた様子がなく、

「ア、左様か」

と答へて言葉がなく、白井中佐も亦淡然と一揖して「誠にどうも……」と將軍を正視しながら後退に辭した。この爲に幕僚の間でも「弔辭を述べたものか」「それには及ばないだらう」と話題には上つたが、場合が場合であつたので、殆んど感傷を伴ふこともなかつた。翌日、乃木將軍に隨つて

戦線に向つた副官の河西大尉が、

「保典さんが戦死されましたさうで……」

と形式的に弔意を表した場合にも、唯だ馬上の老將軍は微笑し、少し仰向きになつて靜かに前進を始めながら、

「オオ」

と答へたのみであり、又他の人からの挨拶にも、勿論、何等の感傷的の應答はなかつたと云ふが、將軍自らは十二月一日の日記に「……今朝、白井中佐、保典昨日戦死ノ事ヲ告ゲ來ル」と誌してをるのである。

勝典の戦死して半ヶ年後に保典も仆れた。曩に掲載した十一月の日記の中にも「保典ヨリ來書」とか、又或は「保典ニ勝典ノ衣、湯地ノ皮足袋ヲ送ル」とか云ふやうな文字が列ねてあるが、明治二十九年六月十五日、仙臺に在任中の將軍が靜子夫人に與へた手束は、保典に對する將軍の情を餘蘊なく述べたものであるがゆゑに、こゝに記すであらう。

今日ころハ無事ニ歸宅相成候事と存候。土曜日朝高行殿被參候而保典之儀相談有之候へどもことはり置き申候。此儀は其許よりも保典へよく御申聞ケ置キ可被成候。右様の事ハまづよくよろしからずと存候間ほか／＼より又々申參候而もことはり可申候。我等事

今日よりじゆんかい、たし、十九日に歸り可申候間野澤事は參り候てよろしく、高橋江申付置候。母上様御出之儀ハ御いそぎ被成候や如何や、御よふ次第申越可被成候。まづは用事のみあら／＼かしこ。

六月十五日

まれ典

靜子殿

この手紙は「保典を養嗣子に……」と親戚の乃木高行を介して懇望せられた時、これを謝絶し、且つ將來に於て左様なことのあつた際にも、決して心動かすことなく、必ず峻拒するやうにと諭したものであるが、保典は時に十五であり、二〇三高地の背面に於て戦死した時は、青春二十四であつたのである。

敵の陸軍と海軍が死力を盡して頑守した二〇三高地も、確實に我が掌裡に收められたが、顧みれば、晝夜の別なく強襲を續くること九日、將卒の仆るゝもの七千五百餘人！全く鐵血を以て奪取し得たものであるがゆゑに、攻撃に當つたものも、又當らざりしものも、眞に感慨を禁ずるところが出来なかつた。白井中佐（二郎、後の中將）は、

「……二〇三が取れたので、翌日、乃木將軍に従ひ、福島少將等と登つた。足許には爆弾でやられた敵と味方の慘ましく、酷たらしい死骸が横たはり、砲弾のために碎かれた岩石は灰のやうに長靴も没する。山頂に立てば、白玉山の山蔭に隠れて我軍を焦してゐた敵艦が全く其面を脱がれて痛烈な我が砲撃に曝され、中には赤い船腹を出して顛覆したのもあり、そこに輝かしい太陽は映ずる。この日の感慨を僕は「機密作戦日誌」に「凄絶と云ふ文字を以て表現したが、壯絶快絶と云ふ言葉では物足らぬので、凄絶とした。全く凄絶そのもので、猶ほ今日でも其の刹那の……即ち凄絶の……深い印象は、恰も烙印されたやうに忘れることが出来ぬ」と繰返して語つたが、必ず左様であつたらう。乃木將軍も「十二月六日、好晴。午後、二〇三に登ル。渡邊、村上、兩聯隊長、觀測將校等ニ握手……」と記してをる。

鐵血を以て奪取した爾靈山の頂上に立つて展望を恣にするれば、往年の我が將卒の如何に惡戦、苦闘したかを偲ぶことが出来る。而して力攻に當つた人々がだにのやうに群りつゝいた急峻の背面を俯瞰すれば、松の生茂る間に隠見する一基の墓標らしきものがある。これは保典の陣歿した處で、急峻の坂を小走りに降つて標前にたてば「乃木保典君戰死之所」と鏤刻し、野生の花が何本か捧げられ、「我子の戰死に泣かない親も、保典少尉の前で泣く」と云ふ木札も見える。爾靈山を訪問する

ものは、必ず此處に到るであらう。

「乃木保典君戰死之所」として「墓」としなかつたのは、こゝに保典の骨も、その他のものも埋められてゐないがためか。否な、左様でなく、深い理由がある。臺石の裏に「明治三十七年十一月三十日、乃木將軍ノ次子少尉保典君、此所ニ戰死ス。長子中尉勝典君、曩ニ金州南山ノ戰ニ歿ス。是ニ至テ將軍復繼承ナシ。役罷テ時人少尉ノ爲ニ墓ヲ此ニ建テ、哀弔ス。四十二年十一月、將軍適來リ視テ曰ク、旅順ノ役戰死スル者、豈獨吾兒ノミナラムヤト。遂ニ命ジテ撤去セシム。聞ク者歎歎セザルハナシ。嗚呼一ハ建テ、一ハ撤ス。其情、其義、世教ニ關スルアリ。本會或ハ將軍ノ旨ニ違ハンコトヲ恐ルト雖モ、唯憾ム、春風秋雨、其事其蹟ト漸ク堙滅セムトスルヲ。因テ石ニ題シテ以テ來茲ニ傳フ。大正七年九月、旅順乃木將軍景仰會」と刻してある。

乃木將軍の十二月の日記を見れば、二十一日の記事中に「……又二〇三ノ海軍觀測所ニ登リ、保典ノ墓ニ詣ズ」云々とあるが、當時の「保典の墓」に誰の心遣りか、水を供へたものがあり、缺けた茶碗に水が盛上つて凍つたまゝにたふれてゐた。その形のみ「保典の墓」に將軍は額いた。——と當時の松平副官（後の中佐、伯爵山田英夫）は語つたが、その日の將軍の姿がまざらうと彷彿する。然り、而して明治四十二年十一月には、靜子夫人も將軍と共に、こゝに保典の墓を弔訪したのである。

そこから右斜に登ること三丁、爾靈山々上の記念碑と相對する山嶺に立てば、白玉山、松樹山、二龍山、望臺……は總て指呼の中にある。我が將卒が此の山嶺を取り、更に躍進して記念碑の聳立する爾靈山の頂上を奪ふまでに半日を要したといふ。こゝにも記念のために二十八重砲の砲彈が建てられてある。即ち我軍が二〇三高地を確實に占領すると共に、この山嶺に觀測所を設置し、各砲臺に著彈の命中を通報し、偉大なる効果を擧げた場所であるから……。爾靈山！この高地を我が掌裡に收めて以來は、敵の士氣が全く阻喪してしまつたのも當然のことであり、軍事の門外漢にも「成程！」と點頭かれる。

◇更に日記を見よ

爾靈山を占領した後の我軍の昂れる意氣に對し、敵の士氣の俄かに阻喪せるは、當然過ぎる當然のことではなければならぬが、この山嶺に攻城重砲兵觀測所を設置し、その通報に依つて各所の我が砲臺は敵の軍艦、陣營を文字通り痛烈に射つたがために、旅順の命數は日一日と逼迫するのみであつた。乃木將軍の十二月の日記は、この間の經過を具に闡明して殆んど餘蘊がない。見よ、力強い其の文字を！

十二月一日

朝、土城子ニ兒玉ヲ待、不來。豊嶋ニ登ル。午食後、曹家屯ニ兒玉ト會ス。兒玉大將高崎山行キ、兼松誘導ス。日夕下山ス。○今朝、白井中佐、保典昨日戦死ノ事ヲ告ゲ來ル。

同 二日

朝、高崎山ニ至リ、日夕還ル。○東京方リンゴ二箱送り來ル。一ツハ保典ノ分ナリ。兒玉ニ煙、リンゴヲ送ル。

同 三日

午後四時ニコルソン中將來訪。小話、別後、馬ヲ駈リ高崎山ニ至ル(一時間)。齋藤枝隊前進命令ニ付決定ヲ與フ。○第一師團ト第七師團ト守備分界ヲ定ム。○兒玉大將ト同宿。○ニコルソン隨行井上一次大尉防寒外套持參。

同 四日

伊地知參謀長、ニコルソント豊嶋山ニ登リ、日夕高崎山ニ來ル。

同 五日

朝方二〇三砲撃、九時方齋藤支隊前進、目的ヲ達ス。

同 六日 好晴

午後、二〇三ニ登ル。渡邊、村上兩聯隊長、觀測將校等ニ握手。歸路、齋藤少將ヲ訪。赤坂山以東ノ敵退却ス。

同 七日 霧アリ

朝食後、高崎山方柳樹房ニ還ル。大嶋中將方カステラ、茶、沖津鯛到來、リンゴヲ送ル。日夕兒玉大將歸ル、夜ル訪。志賀アリ詩談。

同 八日 晴、靜穩

敵艦射撃。午前方兒玉、伊知地ト談ズ。午後、兒玉方各參謀ニ訓示。晝、永田少將來ル。兒玉ト會食。夜、第十一師團前面銃聲盛ナリ。十二時磯村ニ命ジ、注意ス。夜食後、兒玉ヲ訪。榊原アリ。

同 九日 曇、東風

朝、岩村來リ、セバストポリ脱出ヲ報ズ。大庭中佐二〇三山行キ。早朝兒玉ヲ訪ヒ、殿下ノ御宿處ヲ見ル。正午、兒玉大將ノ歸北ヲ送ル、午食後、第十一師團長、第九師團長ヲ訪ヒ、敵情等ヲ聽ク。

同 十日 朝來大風、飛雪

午時、山階殿下御來着、伺候。夜、リンゴ、ミカンヲ獻ズ。夜、大庭中佐歸ル。

同 十一日 有レ風、烈寒、零下十度
殿下、黒井中佐、山岡少佐ト陸戰陣地、豊嶋山御巡視。○各工兵大隊長ヲ工兵部長室ニ會議臨席、午食ヲ共ニス。○保典遺骨遺物ヲ送り來ル。○夜大岡力來談。○今朝有詩、示ニ志賀氏、後ニ長篇ノ和韻アリ。

爾靈山險巖難攀
男子功名期ニ克銀
鍊血覆山々形改
萬人齊仰爾靈山

同 十二日 好晴

保典遺物毛皮マントヲ藤井副官江贈ル。○兼松ト豊嶋山ニ登ル、十一時方三時迄。○坂田時正方ミカン一箱贈り來ル。○全身浴ヲナス。○夜、大谷瑩温外從僧面會ス。○殿下終御休養。安原捕虜ヲ從ヘテ爾靈山ニ登ル。

同 十三日 好晴、午後微雪

殿下御休養。○安原大孤山ニ登ル、如レ昨

同 十四日 夜來雪約五寸積ル

朝、兼松ト第九師團ニ至リ、二龍山ニ平佐ヲ訪ヒ（途ニ一戸ヲ訪ヒ）松樹山ニ至リ見ル。歸路、又第九師團ニ小話。又前田少將ヲ訪フテ歸ル。

○殿下へ伺候ス。○莊原、石黒、集作等方來書、保典ノ用意ナリ。長谷川大將方來書。○第七師團方白水參謀來ル、前進ノ事。○本日渡邊大佐松樹山下ニ捕虜名簿ヲ交換ス。

同 十五日 曇

朝、岩村來リ高崎ノ變ヲ報ズ。參謀長ト議シ、大庭中佐ヲ連合艦隊ニ遣ル。○鮫島師團長來リ、十八日奇襲ノ事ヲ決ス。佐藤大佐ヲ呼ブ、共ニ午食ス。○磯村少佐歸京、保典ノ遺物ヲ托送ス。○鮫島中將ニ雁ヲ贈ル。午後三時、第一師團第三聯隊方面ニ敵ノ軍使來ル、病院砲撃ヲ苦ムノ件ナリ。夜、有賀博士等ヲ集、參謀長答案ヲ議ス。

同 十六日

朝、山階殿下御來臨。後、十時比殿下及其他ト撮影。午時、内田公使、井上子爵、青木大佐、瀬川領事來ル。内田煙艸ノ贈アリ。同汽車ニテ、殿下御歸京、御見送り。大迫中將來ル。津野田參謀過日策戰意見ヲ稍過言ノ件ニ付云々。朝、志賀氏來ル、皮袋ニ書シ與フ。本日訓示艸案ヲ添削ス。齋藤少佐、有賀博士軍使ト會見。○本日椅子山ヨリ投降アリ。○内田ノ一行豊嶋山ニ登ル、夜食ヲ共ニシ、夜八時出發。

同 十七日 晴

今曉、第七師團高丁山占領、九時報アリ。昨夜方山岡參謀第七師團ニ到ル。鴨湖嘴ノ砲臺門火藥庫ヲ破リ北砲亦火藥庫ヲ破ル。望臺裏ノ敵數百ヲ野砲ニテ斃ス。○水雷艇一隻撃沈。○夜十二時、大庭中佐聯合艦隊方歸ル。○近野工兵隊長、和田大尉ヲ參謀長招致ス、一泊。

同 十八日 稀有之好晴

朝、大庭ノ報告ヲ聞ク、大岡力來ル、告別、詩ヲ書ス。惣司令官方特使、訓令來ル。午時方豊島山ニ登ル。二時十五分、北砲臺爆破。○二〇三、二時三十分、銃彈爆破裂死傷アリ。○夜十一時五十分、北砲臺全部占領、祝詞ヲ送ル。

同 十九日 好晴

朝、シヤンパンヲ鮫島ニ送ル。○本日河西、兼松、松平轉務。○村田丹陵告別ニ來ル。

同 廿日 好晴

午時、東郷海軍大將、參謀秋山中佐外壹名ト來營。今後作戰ノ目的ニ付相談ス。午食後大庭中佐誘導、火石岑子ニ徒步行。夜ニ入り歸來。夜食後、九時ノ瀛車ニテ歸艦。

同 廿一日 曇

朝八時半、齋藤參謀、松平副官、橋本少尉ヲ連、第七師團司令部ニ到ル。各旅團長アリ、午食ヲ共ニス。(大迫ト吉田ニ茶ヲ贈ル)。食後、齋藤少將誘導、山砲陣地ニ登リ、又二〇三ノ海陸軍觀測所ニ登リ、保典ノ墓ニ詣ズ。吉田少將ノ陣屋ニ喫茶ス。(觀測所ニ御影池中佐ニ逢ヒ、二十八珮砲床遲延ノ事ヲ砲兵司令部ニ電話セシム)。齋藤少將、白水參謀ト別レ、海軍十五珮ノ砲床ヲ見テ歸ル、夜ル月色良。大庭、伊豆、宮田、奈良ト會食、雑話。

同 廿二日 晴、夜月朗、無風ナリ

今朝、鳩灣凸半小島占領ノ報アリ。祝詞ヲ第七師團長ニ送ル。陸軍省副官石浦大尉來ル。大臣、次官方名刺到來、○土方伯方吊書來、柴直言等外數通。○大庭中佐夜第九師團第一線巡視。

同 廿三日 好晴

拂曉、吉田旅團太陽嶺北砲臺前ノ高地ヲ占領ス。○遠藤守備軍經理部長來、昨日北砲臺、大孤山ヲ見テ今日歸任ス。○午後三時、大迫中將ヲ呼ビ、友安少將ノ事ヲ大臣ニ答フ、晚食ヲ共ニス。○杉翁方來書。山口ノ作間久吉方來書、有詩(註)。○夜工兵部長報告ヲ聞ク。○今夜二龍山ノ敵對抗路爆破サル、ノ報アリ。

(註) 「山口ノ作間久吉方來書、有詩」云々の詩は、「阿兄勝典勇拔群、阿弟保典武兼文、乃父將軍名

希典、一家三典皆從軍、將軍發日告遺志、武夫捨命尋常事、一人戰死勿出棺、留一且待二兩個至、果然南山激戰時、冒險奮闘、失二長兒、敵彈無情旅順役、復爲三乃木一折一杖、接報將軍色不レ動、將軍不レ痛聞者痛、守レ棺夫人感如何、夫人不レ慟、民慟、君不レ見忠臣三楠公、殉難報國闔門空、壯烈古今堪二相比、三典獻身取二遠東一と云ふのである。

同 廿四日 好晴

午前、工兵部長來り、二龍山廿八日ノ報告アリ。午後、スミス大佐東京に歸ル、告別。吉田部長ヲ訪フ、不在ナリ。夜、落合部長ノ病ヲ訪フ。落合、安原、津野田病氣ノ爲メミカン、リンゴヲ贈ル。

同 廿五日 好晴、無風

朝、七時半、松平、橋本ト第九師團司令部ニ馬ヲ騎シ、兩砲臺下ニ卅五第三大隊長ニ逢ヒ、一戸堡壘ニ五五砲床構築ヲ見、北砲臺下ニ廿二聯隊本部ニ山中旅團青木聯隊長ト逢、同伴、全砲臺ヲ見ル。別レテQノ坑路頭ヲ見ル。新山聯隊長ノ宿舍ニ寄り、第十一ノ參謀馬ヲ伴ヒ來ルニ逢ヒ、騎シテ十一司令部ニ至リ、司令官ト午食ヲ共ニス、小豆飯アリ。前田旅團長來リ居ル。歸路、岩本大隊長ニ面會、握手、名譽ヲ祝ス。瀧本聯隊長アリ、歸ル。松平、副官意見ヲ述ブルヲ聞ク。伊知地參謀長發熱臥床。

同 廿六日 好晴、無風

午後、豊嶋山ニ登ル。○東京留守宅方ウイスキ其他及ビ保典ニ諸品到來、乾柿腐敗物品ヲ汚ス甚シ。○日夕、豊嶋少將來リ、夜食ヲ共ニス。敵彈製小香爐持參。

同 廿七日 好晴

午後、英國工兵少佐クワン來訪。日夕、吉田部長ノ宿舍ヲ訪フ。不在ナリ。午前、志賀氏來リ、筑紫中佐ノ詩アリ。

同 廿八日 曇、靜穩

朝、早ク豊嶋山ニ登ル、(參謀長病氣不參)。十時、二龍山爆破、午後四時突撃、夜八時全部占領。六時下山、歸營。

同 廿九日 朝來烈風揚塵

朝方大庭中佐二龍山行。○留守方馬具其外來ル。

同 三十日 好晴

○書ヲ留守ニ送ル。

同 三十一日 好晴

朝、八時半登山。十時、松樹山爆破。午後二時、二龍山ヨリ烏帽子山突撃、苦戰。六時、盤龍山東砲臺前爆破。

◇ 難攻不落の砦も

爾靈山の陥落に依つて我軍の士氣は昂り、行詰りの状態にあつた各方面の攻略も、一日と活氣を帯び、直ちに旅順を取らねばならぬ」との意氣は何處にも鮮かに磅礴した。その結果は、十二月六日から十一日に至る砲撃に依り、港内に潜んでゐた敵艦を悉く撃沈し、以て海軍の要望に副ひ東航中のバルチック艦隊の來航を悠々と迎へることが出来るやうになつた。而して攻城の諸準備は愈々進捗し、坑道作業も亦完成したので、十六日、將軍は次のやうな訓示を布告した。

旅順要塞第三回ノ總攻撃ヲ實施セントスルヤ、事、上聞ニ達シ、畏クモ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜フ。希典奉答スラク、我軍ノ將卒深ク

聖旨ヲ奉體シ、誓テ速ニ軍ノ任務ヲ達セントコトヲ期スト。是レ諸子ガ熟知スル所、惟フニ第三回總攻撃ニ於テ、千古殆ンド稀ナル勇敢、壯烈ノ攻撃ヲ實施シタルモノ、是レ豈將卒一般深ク聖旨ヲ奉體シタルノ致ス所ニアラズシテ何ゾヤ。諸子ガ奮闘ニ對シ、本防禦戰ノ攻撃ハ、豫期ノ如ク成功セザリシト雖、敵ガ殆ド全力ヲ擧ゲテ頑強ニ抵抗セシニ〇三高地ハ、十二月五日ヲ以テ全ク我有二期セリ。蓋シ該高地ハ旅順要塞ノ致命ヲ制スベキ要衝ニシテ、其占領ハ實ニ旅順港内ニ於ケル敵艦隊ノ全滅ヲ促シタリ。即チ二百三高地ノ占領後一週日ヲ出デズシテ、敵ノ堅艦ハ殆ンド我軍砲ノ爲メニ撃沈セラレ、目下餘ス所ハ僅ニ小艦數隻ニ過ギズ。此等殘艦ノ餘命亦指ヲ屈シテ算ヘ得ベキノミ。敵ヤ既ニ衣食ニ窮セリ。其戰員ハ減耗セリ。加アルニ彈藥モ亦將ニ竭キントス。此窮境ニ際シ我軍砲ハ日夜敵ノ殘艦ト要塞内部ニ於ケル軍用ノ資源トヲ破壊シツ、アリ。又敵ノ本防禦線中 其主要ノ點ニ對シテハ、

諸子ガ堅忍ト勇敢トニ賴リテ益々肉迫セリ。之ヲ攻略スルノ時機遠キニ非ラザルヲ知ルベシ。今ヤ時運寒ニ向ヒ、攻撃ノ諸動作逐日困難ノ度ヲ増進スト雖、亡戰友諸子ガ勇敢、忠烈、以テ殉國ノ義ヲ致シタル所以ヲ回想セバ、豈感奮、興起セズシテ可ナランヤ。諸子ガ君國ノ爲メニ盡スハ、正ニ此ノ秋ニ在リ。諸子一層奮勵努力セヨ。

明治三十七年十二月十六日

第三軍司令官 男爵 乃 木 希 典

乃木將軍は此の訓示に心血を注いで推敲した。見よ、その日記にも「…本日訓示艸案ヲ添削ス」(十二月十六日)とあるではないか。この將軍の心は全軍にも強く感應したのであらう。十八日には東鷄冠山北堡壘を爆破、占領するに至つたが、又更に續いて二十八日には一龍山堡壘ヲ奪取シ、大晦日の三十一日には松樹山堡壘を爆破、占領してしまつた。斯く我軍は敵の金城とも、湯池とも恃み、半歳に亘つて我軍を悩ました本防禦線を犄々と攻めて撃破したが、敵の後方には猶ほ第二、第三の防禦線があり、未だ我軍の掌裡に收めざる砲臺、堡壘あるのみでなく、窺かに探知した處では、敵側には更に抵抗を續けることの出来る兵力と之に相當する彈藥、糧食の用意あることも明かになつたので、如何に彼が屏息しても、開城に未だ時間があるものと稽へられる。併し絶好の機會を捕へた我軍は、敵に一息もつかしめず、一舉に全要塞を攻略すると云ふ軍略の下に邁往した。昂

れる士氣は文字通り破竹のやうに、明治三十八年一月一日、未明に各方面は攻撃に努めたが、殊に望臺——二龍山と東鷄冠山北堡壘の略ぼ中間にあり——に向つて主力を注いだ。

望臺は一の小山に過ぎぬが、この方面では抽んでた高丘であるがために、第一回の攻撃の時から我軍の好目標となり、前年八月の總攻撃に、こゝに向つて驀進した第九、第十一師團の突撃隊が全滅し、殆んど死骸を以て全山を掩ふた思出での深い場所、謂はゞ元旦の弔ひ合戦である。そして朝敵將に東天に紅ならんとする頃、第九師團の參謀から「我が一小部隊は、今朝H高地の巔頂を占領し、萬歳を唱へた！」と云ふ電話が軍司令部に通じた。このH高地は望臺の右にあつて、望臺と共に我軍を悩ましたが、そのH高地をも占領したので、第九師團の攻撃隊は、こゝを足場に大に猛撃を加へ、第十一師團は東鷄冠山方面から突進し、午後三時三十分には完全に之を掌裡に收めた。最も展望の利く望臺を占領してしまつたのである。

然るに略ぼ同時刻に、第一師團の參謀から「只今敵の軍使が水師營C堡壘前に來たので、歩兵第二聯隊から將校一名を出して迎へたが、信書らしいものを齎したので、之を受領した」と云ふ電話があつた。敵の軍使？ 今までも軍使は來た。殊に攻撃が日一日と猛烈になつてからと云ふものは、病院を射たれては迷惑だとか、何處を射つてくれるな——とか、窮狀を自ら告白するやうなことを訴へるために軍使は屢々來たのであるが、この時の軍使のみに就ては、何とはなしに重大な使

命を帯びたものであるやうに直感せられた。そこで電話に出た白井中佐が、

「その信書が軍司令官あてのものぢやつたら直接こちらに送達してくれ」

と命じた。受話機を緊握した中佐は「或はステッセルから開城の申込みではないか」と直感した

が、「開城の爲の軍使だらう！」と云へば、何だか尻古たれて自ら弱音を吐くやうに受取られはせぬ

かと瘦我慢してをつた。處が先方からは、

「今の信書は軍司令官閣下あてのものであつたので、C堡壘から遞歩哨で師團司令部に送付したが、届き次第、更に傳騎を以て送付することにしよう」

と云ふ返事であつた。このC堡壘は水師營の前方にある第一師團の第一線であり、そこから第一師團司令部のある高崎山までは一里以上あるのみでなく、更に軍司令部のある柳樹房と高崎山の距離が約三里あるので、問題の敵からの信書が軍司令部に届けられたのは、午後八時頃であつたが、第一に此の信書を手にしたのは白井中佐で、緊張しながら鈇を大急ぎで入れると意外、眞に意外にも、敵からの信書は英文で認められてゐた。露西亞の上流の人は、國語のやうに佛語を練ると同時に、社交上の書面は慣習的に佛語を以てする。佛國通の白井中佐は、英文で認められた書面を暫く凝視してをつたが、「開城」(Capitulation)と云ふ文字は、英語も、佛語も同じであるので、その書面を驚ぶかみにして軍參謀長伊地知少將(幸介、後の中將)の室に飛込み、間もなく幕僚も集ま

り、軍司令部附の國際法顧問法學博士有賀長雄が譯すれば、

旅順一九〇四年（露曆、日附なし）二五四五號

貴下

交戦地域全般ノ形勢ヲ考察スルニ、今後ニ於ケル旅順口ノ抵抗ハ不用ナリ。依ツテ無益ニ人命ヲ損ゼザル
タメ、余ハ開城ニツキ談判センコトヲ望ム。若シ閣下之ニ同意セラル、ニ於テハ、開城ノ條件及順序ヲ討議
スルタメ、委員ヲ指名シ、竝ニ余ノ委員ガ該委員ニ會同スベキ場所ヲ選定セラレンコトヲ希フ。
余ハ此機會ヲ利用シ、余ノ敬意ヲ表ス。

將官 ステツセル

旅順口攻圍軍司令官男爵エム乃木閣下

とあつた。勿論、その席には乃木將軍も列してゐたが、有賀博士の譯文に依つて要件が明かにな
つても、依然として固い沈黙が続いた。窃かに「ホッ」とするものがあつても、これを露骨に他に
表示することをしなかつた。併し名状し難い満足の色は乃木將軍の顔にも看取し得られた。そして
次の返書は、翌二日の早朝を以て山岡少佐（熊治、後の中佐）をして籠城軍の首將に交附せしめ
られた。

一九〇五年一月二日 旅順攻圍軍司令部ニ於テ

貴下

余ハ茲ニ開城ノ條件及順序ニツキ談判セントスル閣下ノ提議ニ同意スルノ光榮ヲ有ス。之ガタメ余ハ旅順
攻圍軍參謀長少將伊地知幸介ヲ委員ニ指名シ、尙之ニ若干名ノ參謀及文官ヲ隨行セシム。彼等ハ本日即チ一
九〇五年一月二日ノ正午ニ水師營ニ於テ貴軍委員ニ會同スベシ。

双方ノ委員ハ調印ノ後、批准ヲ待タズシテ、直チニ效力ヲ生ズル開城規約ニ署名スルノ全權ヲ有スベシ。
其ノ全權委員狀ハ双方ノ最上指揮官ノ署名シタルモノニテ、互ニ交換スベシ。

余ハ此機會ヲ利用シ、敬意ヲ表ス。

旅順口攻圍軍司令官男爵 乃木 希典

關東要塞地區司令官ステツセル將軍閣下

我が伊地知少將の一行は、露國側の委員である關東要塞地區參謀長リース大佐等と水師營に會見
し、その日の午後四時三十分を以て既に用意してゐた我が提案に依る開城の諸要件の談判を終り、
完全に旅順は我が掌裡に收められることになつたが、午後十一時三十分、

將官ステツセルヨリ開城ノ提議ヲナシ來リタル件 伏奏シタル處

陛下ニハ、將官ステツセルガ祖國ノタメ盡シタル功ヲ嘉シ給ヒ、武士ノ名譽ヲ保タシムベキコト
ヲ望マセラル

と云ふ 聖旨が参謀總長を経て乃木將軍に電報せられたことを伊地知少將からレース大佐に傳へた。突如として茲に 聖旨を賜はつたので、開城の規約中に首將ステツセル以下の將校達に帶劍を許し、又再び軍に従事せぬことを宣誓するものには歸國を許すの特典をも與へた。

旅順は遂に開城した。「難攻不落」てふ矜持裡の堅塞も、明治三十七年八月十九日、第一回の痛烈な總攻撃を開始して以來百三十七日にして完全に我が軍門に降つた。而して旅順の攻圍に使用した我が兵力は約十萬、死傷六萬二百十二名——内戦死一萬五千四百餘名——であつたが、敵の兵力は戦闘員三萬五千、死傷一萬二千餘名（内死者二、三千）であり、開城の際の浮虜は、海軍兵並に義勇兵をも併算して三萬八千餘人（約二萬人の傷病者）であつたが、更に牢記すべきは、敵の残存せる彈藥及び貯藏の主食食物のみでも、尙且つ二十日間を支持し得るものであつたことである。

◇名畫を描くもの

旅順は落ちた！ 敵將ステツセルに向つて返書を草すると同時に、乃木將軍は大本營、聯合艦隊滿洲軍に此の吉報を齎したが、東京に此の快報が達したのは、一日も既に深更であつたがために、二日の朝に参謀次長から 大元帥陛下に奏上し、同時に普く國民に知らしめたので、これを待ちも待つてゐた我が國民は、狂するやうに拊舞し、何處にも熱烈極まる提燈行列が行はれたが、更に

沙河に對陣中であつた我が將卒に此の好報の達したのは、元日の眞夜中であつたが、それが傳はると同時に「萬歳、萬歳！」の聲は戦線から戦線に起り、天地を揺すやうな喊聲に依つて露軍も「旅順が落ちたのだらう」と察知したと云ふ。併し死力を盡して攻略に従ひつゝあつた攻圍軍の將卒が此の開城を知つたのは、實に二日に完全に開城の規約成つてからのことである。

沙河方面で熱狂的に「萬歳、萬歳！」と叫ばれ、内地に於て人々が提燈を弄りながら「旅順も落ちましたなア」と祝福しつゝあつた時も、猶ほ緊張して攻圍軍の將卒は攻撃の姿勢を取つてゐた。そして快報が初めて傳達された時、誰の眼にも涙があつた。無言の儘に顔見あはせるのみであつたが、軈て塹壕を出で、砲臺の上に露出し、旗を押立てるもの、シャツ一枚になつて頻りに上衣、或は毛布を振るもの、それが朝日に映じて壯嚴のシーンを描き、何處にも爆發的の「萬歳、萬歳！」が轟いた。と同時に、昨日まで敵となり、味方となつてゐた兩軍の人々も、欣々然として握手し、或は煙草を與ふるもの、パンを贈るもの、言葉は通ぜずとも、そこに平和と歡喜とが満ちた。「戦争」も全く結了してしまつたかのやうな光景を呈したのである。

旅順攻圍の第三軍に主將であつた乃木將軍の當時に於ける感懷は、果して如何なるものであつたらう？ 左なきだに將軍は其の胸衷を語らなかつたが、幕僚や揮下の師團長が祝辭を述べても、却つて勞苦を犒ひ、光輝ある我が偉勳を忘れたかのやうであつた。併し事甚だ多かつた一月の第一日

から十二日に至る乃木將軍の日記には、次のやうな文字が極めて淡々と列ねてあつた。

明治三十八年一月一日 好晴

午前二時比銃聲熾ナリ。拂曉、第九師團ノ一部高地占領ノ報アリ。續テ望臺ヲ攻撃、第九、第十一師團協力、午後占領。午後二時半比敵ノ軍使來ル、開城ノ事ナリ。夜ル會議、期約書ナル。

同 二日 好晴

朝、山岡少佐先發、十二時ヲ期シ、委員長伊地知少將、有賀等水師營ニテ會見、夜ニ入調印濟ミ。朝書ヲ兒玉大將ニ送ル。

同 三日 好晴

守備軍參謀、川上事務官來ル。西大將 ヨリ名刺ニ

きのふまで砦ヲ守る仇人も

けふは浮世の友にやあるら舞

返しに

射向ひし敵もけふは大君の

惠の露に沾ほひニけり

夜、食事ヲ共ニス。兵站藤井參謀長モ亦同ジ。朝、友安少將轉職告別ニ來ル。

同 四日 好晴、曉 霜甚ガ多シ

本日津野田、川上ヲ遣リ、ステツセルニ雞三十羽、酒貳ダースヲ送ル。明日ノ會見ヲ約セシム、(一昨彼ヨリ申込アルニヨル)。財部海軍中佐各國公使館付武官十一名ト來ル。夜ル貴族院議員高木、伊集院、楠目等來ル。

同 五日 好晴

朝、參謀長、安村參謀、川上ト水師營ニ到リ(津野田參謀ステツセルヲ迎へ、共ニ來リ待ツ)會見。費辨當ヲ共ニ食シ、別後、松樹山、二龍山ヲ見テ歸ル。

同 六日 好晴

朝、大島中將來ル。工兵中隊兩人告別(近衛、第六師團)。隱岐少將來着、午食ヲ共ニス。英國及スエズ軍醫來ル、面會。夜ル海軍外國將校等貴族院議員ト會食ス、奏樂ス。

○勅語ヲ賜ハル。

同 七日 好晴

午前、松村中將來ル。衆議院議員十三名來ル、病中面會ス。○軍醫來診、左眼腫物ヲ燒ク。感狀訂正。皇后陛下及皇太子殿下方令旨ヲ賜フ。

同 八日 好晴

朝、伊集院議員告別ニ來ル。○外國海軍武官歸還、財部中佐ニ逢フ。○第一軍吉岡參謀來ル。黒木大將、藤井參謀長方名刺。第三艦隊參謀來ル。片岡中將、東郷少將ヲ祝詞、名刺アリ。夕刻、參謀長長岑子巡視。

○山岡參謀ハダルニ一行キ。○福島副官受降事務ヲ歸ル。夜ル高木海軍々醫監來リ、脚氣病論ヲ説ク。○露將校宣誓ノ件ニ付、參謀長、有賀ト共ニ議ス。

同 九日 曇後晴

朝、又高木氏昨日ノ談ニ付書付持參、告別。本日各參謀長會議。○石黒、集作、其他數通來書。

同 十日 好晴

朝、末永病院院長來ル。鮫島中將來ル。片岡海軍中將、土屋中佐、機關監來ル、午食ヲ共ニス。日夕、片岡中將ノ宿處ヲ訪。

同 十一日 好晴

朝、片岡中將來リ、告別岩村參謀、旅順行キ。本日午後一時半ステツセル長岑子ヲ發ス。同夫人ニ菓子を贈ル、川上持參。昨今祝書、祝電多ク來ル、本日獨逸皇帝方勳章ヲ賜フノ勅電到來。○兒玉方注意アリ。寺内大臣ニ聞キ合セ公報アリ。○大迫中將來ル、ステツセル送りノ歸路。參謀長、副長、白井モ停車場ニ至ル。

同 十二日 朝曇、午後晴

齋藤少將午後十一時發營口ニ到ル爲メ午後來ル。牛島少將ノ子息ヨリ菓子ノ大箱ヲ貰フ。○齋藤少將ニ煙艸ト菓子ヲ贈ル。

かう云ふやうに乃木將軍の日記は一月十二日までしかない。そして讀むものに深甚の感懷を禁ぜざらしむるが、歴史的の名畫であり、不朽に傳へらるべきステツセル將軍との水師營の會見も、五

日の記事中に「……會見、晝辨當ヲ共ニ食シ、別後、松樹山、二龍山ヲ見テ歸ル」とあるのみであるが、こゝにも乃木將軍の全人格が躍如としてをる。

乃木、ステツセルの兩將軍が會見した水師營は、現在の旅順驛から北方一里十一丁にして達するが、「會見所」であつた支那家屋は、その儘に保存してある。昭和三年十月二日、そこを訪ふた著者は、庭内を靜かに往來し、次の「尋常小學國語讀本」卷十の「十五、水師營の會見」を無意識に口吟まらずにゐられなかつた。名畫を展くやうに、當年の輝かしい光景が描かれてゐるから……。

- 一、旅順開城約成りて、敵の將軍ステツセル、
- 乃木大將と會見の、所はいづこ水師營。
- 二、庭に一本棗の木、彈丸あともいちじくるく、
- くづれ残れる民屋に、今ぞ相見る、二將軍。
- 三、乃木大將は、おそかに、御めぐみ深き大君の、
- 大みことのり傳ふれば、彼かしこみて謝しまつる。
- 四、昨日の敵は今日の友、語る言葉も打ちとけて、
- 我はたへつ、かの防備、かれは稱へつ、我が武勇。

- 五、かたち正して言ひ出でぬ、
「此の方面の戦鬪に、
閣下の心如何にぞ」と。
- 六、「二人の我が子それづくに、
死所を得たるを喜べり、
大將 答へ力あり。
なほも盡きせぬ物語り
今日の記念に獻ずべし。」
- 七、兩將 晝食共にして、
「我に愛する良馬あり、
軍のおきてにしたがひて、
ながくいたはり養はん。」
別れて行くや右左、
ひらめき立てり、日の御旗。
- 八、「厚意謝するに餘りあり、
他日我が手に受領せば、
- 九、「さらば」と握手ねんごろに、
砲音絶えし砲臺に、

思出では湧く。往時を追へば、感懐を咬らぬはないが、門に一步を入れ、第一に誰にも注目されるのは、左の練堀に沿ふた一本の棗であらう。百年餘の樹齡を重ねた老棗であると云ふが、乃木、ステツセル 兩將軍の會見した日を物語り顔である。……我國に於て赤飯に必ず小豆を用ひるやうに、支那では棗を使用するが、この水師營の記念の棗は、如何にしてか、甚だしい酸味を帯び、食用に供せられなかつたにかゝはらず、乃木將軍逝いて十有七年を経た昭和三年の秋實つたものから

賞味し得られるやうになつたといふ。棗、棗！ 永遠に生きよ。さらば訪ふ人々にも盡きぬ思出でとなるであらう。

◇ 柳樹房の日々は

乃木將軍が水師營でステツセル將軍と歴史的の會見をした翌六日に 勅語を賜はつた。旅順開城を嘉せられたもので、

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ。第三軍及ビ聯合艦隊ハ、協同戮力、久シク寒暑ヲ冒シ、苦難ヲ凌ギ、勇戦奮闘、克ク其鐵壘ヲ奪取シ、堅艦ヲ殲滅シ、敵ヲシテ遂ニ城を開キ、降を乞フニ至ラシム 朕深ク 爾將 卒ノ克ク其重任ヲ全フシ、偉大ナル功績ヲ奏シタルヲ嘉ス。

と拜誦するのみでも、猶ほ感激を禁ずることが出来ぬ。又七日には 皇后陛下、皇太子殿下より令旨を賜はり、十一日に降將ステツセルも旅順を去つたが、この日の乃木將軍の手記は「……本日午後一時半ステツセル長岑子ヲ發ス。同夫人ニ菓子ヲ贈ル、川上持參」とある。十二日に入城式があり、翌日の午後十一時には陣歿將卒の招魂祭が舉行せられたが、式場は水師營の西端の一望開潤、旅順背面の堡壘一帯を指呼し得る高地で、第三軍が本攻圍線に就いて以來、長く滯陣し、最も苦戦した處であるがために、こゝが選まれた。そして乃木將軍は、次の弔詞を沈痛裡に朗讀したの

である。

維時明治三十八年一月十四日、第三軍司令官乃木希典等謹ミテ清酌、庶羞ノ奠ヲ以テ我第三軍殉難將卒ノ靈ヲ祭ル。

曩ニ我軍ノ關東半島ニ上陸セシ以來、茲ニ二百十餘日、其間諸子ハ善ク勇往シ、善ク健闘シ、或ハ鋒鏑、砲火ノ下ニ命ヲ致シ、或ハ風餐、雨虐ノ間ニ病歿セシ者少シトセズ。而モ其功業遂ニ空シカラズ、茲ニ旅順口内敵艦隊ノ全滅ニ歸シ、敵要塞ノ降伏ヲ見ルニ至リシモノ、洵ニ諸子ノ遺烈ニ因ル。希典等諸子ト生死ヲ共ニシ、而モ生キテ

大元帥陛下ヨリ優渥ナル 勅語ヲ下賜セラル、ニ會ヒ、願ミテ諸子ガ遺烈ヲ念ヘバ、豈獨リ此光榮ヲ享クルニ忍ビシヤ。嗚呼、諸子ト此光榮ヲ頌タントシテ幽明相隔ツ、哀哉。仍チ我軍ノ旅順口ニ入ルヤ、諸子ガ忠血ヲ以テ染メタル山川ト要塞トヲ下瞰スル處ヲ相シ、先ヅ地ヲ清メ、壇ヲ設ケテ諸子ガ英魂ヲ招ク。庶幾クハ魂ヤ髣髴トシテ來リ饗ケヨ。

明治三十八年一月十四日

第三軍司令官 陸軍大將 男爵 乃木 希典

旅順を其の掌裡に收め、引續いて入城式、招魂祭にも、乃木將軍は柳樹房の司令部から通ひ、旅順には移らなかつた。随つて勝利に酔ふて陶然たるが如きものなく、一月十五日に軍の一部は、

武步肅々、既に北進を開始したが、北征の途に將軍が慨然として上るまで起臥した柳樹房は思出での爾靈山、水師營……と同列に、旅順に入るもの、訪問せねばならぬ處であるにかゝはらず、今では力強く語るものさへもなく、訪ふものも亦稀であると云ふ。記念すべき柳樹房！こゝに在りし日々の乃木將軍の生活こそ懐かしく、興味をも咬るものでなければならぬ。永遠に其の地名は忘れられぬであらう。

柳樹房、柳樹房！大連を發して汽車を旅順に取るならば、夏家河子ステーションを過ぎ、營城子ステーションも間近くなつた地點の左方の線路寄り一丁餘の場所に大きな石柱を見るであらう。その表には「第三軍駐營地 陸軍中將 白井二郎書」と刻まれてをる。石柱に沿ふてだら／＼と小徑を降れば、溝と名付けるが寧ろ適當と考へられる小川があつて、楊柳が茂り、川底には水も見受けられる。小川を越えて右すること數間、左方に黒塗りの横に「善爲至寶」(裏に「心作良田」と彫つた額面のかゝつた門があり、門の左方に「周運來」の標札ある一民屋を見る。こゝは三瀾堡會柳樹房で、乃木將軍の起臥した處である。

この周運來は三天地即ち一千五百餘坪の土地を持つてをる中流の百姓であるが、門に一步を入れて目立つものは、右側に聳つ槐樹で、多くの年月を経たものらしく、この樹下には攻圍軍の

電話、電信機が備付けられてゐたと云ふ。又更に十數歩して玄關(と云ふのは適切でなく、入口)に達すれば、右に一室あつて、左に二室あり、その不汚なるは支那人に通用であるが、左の室内に乃木將軍夫妻の寫眞の掲げられてあるのは、流石に此の民家が故將軍と貧賤の淺からざるものであつたことが點頭かれる。勿論、この周運來の住居は新に建築したもので、乃木將軍が起臥した頃のものは、京都桃山の乃木神社の境内に移されてゐるが、運來は「元の住居を銀五百三十圓で讓渡し、又他に銀五百三十圓をもらつて此の家屋を元の住居と同じ間取りに建てた」と語つてゐた。

乃木將軍夫妻の寫眞の掲げられた部屋の入口に近きものを當年の我が將軍は司令官としての公室に、他の一室を以て寢室に充てゝゐるが、衣食共に質素なものであつた。併し兵食にあらざれば口にせずとか、又或は唯だ一枚の薄い毛布で夏冬共に押通したとか云ふ流説は、決して眞相を穿つたものでない。將軍自らの陣中日記に徴すれば、流説の誤まれるものであることも明了するであらう。明治三十七年十一月十一日の乃木將軍の日記に「……夜食シヤンパンを飲ム、誕辰ノ故ナリ」とあるが、將軍は好んで來客ある時には、食事を共にした。日記にも屢々此のことが手記せられてゐるが、俱に食卓を共にするにも、相手の好むものを心得てゐて、必ず一品は之を調理せしめたものである。

來客の時のみでなく、平常にも參謀長、參謀副長と共に食事することが多く、他の幕僚を招いて

愉快に撮ることも亦少くなかつた。さう云ふ場合には、數個の容器に盛られた美味を將軍は何時か一つの容器に集めて置かれる。氣銃の幕僚達が、

「矢張り容器は別にするがいゝですなア、味の違つたものを一緒にしては旨くないですから……」と遠慮なしに云へば、將軍は笑ひながら相手の顔を凝視しつゝあるが、恰も我子にでも對するやうな態度で、

「フム、左様か。儂は調法な腹をもつてゐるので、これがいゝのぢやヨ」と答へるのであつた。蓋し將軍は徒に品數を多くし、陣中に於て容器と共に置場所を取ることの面白くないのを戒めたものであらう。

又更に征途に上つて以來、廣島に於て靜子夫人に「カツスケセンシマンゾクス……」云々と打電し、「父子二人の柩を同時に出すまで葬式をするな」と云ふ手紙を出した以外には、全く東京の留守邸にハガキ一枚すら送らなかつたと世間には傳へられてゐるが、これも亦決して眞相を穿つたものでなく、日記の中には「留守ニ送書ス」と云ふ文字が屢々見え、留守邸からの來書も滋く、諸の物品が送られてゐる。そして夫人の心盡しの品々は幕僚達にも、部下の諸將連にも贈呈せられた。自ら煙草、リンゴ、菓子……を將軍が携へて第一線にある諸氏に贈つたことを記載した其の日記は今日讀むものをして感激せしむる。この人の揮下に在つた將卒が喜んで死地に入つたのも、當然で

なければならぬ。

◇敵前に暴露して

乃木將軍は戦線を絶えず巡視し、無言の裡に將卒を勵ましてゐたが、猛撃更に猛撃を加へても、旅順の堅塞易く攻略し得ぬがために、滿洲軍と聯合艦隊と大本營から督促の厳しくなるに随伴し、將軍の第一線に暴露することが滋くなつた。そして或る場合には衛兵長さへも伴はず出掛ける。殊に保典が爾靈山で戦死してからは、幕僚間でも「注意せねばならぬ」と密かに警戒するやうになつた。そして何氣なしに諫めれば、

「なアに儂は危い場所を除けることが上手だから心配はないのぢやヨ」

と事も無氣に笑つてをる。併し油斷がならぬので、大に警戒してゐたにかゝはらず、馬上豊かに傳騎一、二騎のみを伴ふて將軍は第一線を巡視し、敵前にも猶ほ暴露してゐた、明治三十七年十二月二十五日の日記の末尾近く「……松平副官意見ヲ述ブルヲ聞ク」とあるが、この淡々たる記述中には、面白いエピソードが残されてをる。

十二月十九日の日記に「……本日河西、兼松、松平轉務」とあるやうに、第二副官の河西大尉、

(惟一、後の中將)が軍參謀に榮轉し、第三副官の兼松大尉(習吉、後の少將)が第二副官となり、新に松平大尉——後の中佐伯爵山田英夫——が第三副官に任ぜられた。松平大尉が赴任すると共に、特に將軍の身邊に就て注意するやうにと囁かれてゐたので、絶えず警戒してゐたのであるが、二十五日の朝七時半、松平大尉と衛兵長の橋本少尉(虎之助、後の中將)とを伴ひ、第九師團司令部を乃木將軍は訪ふた。當時の第九師團は、松樹山堡壘の攻撃に當つてゐたので、その督戦の爲の巡視であつたのであらう。日記には「……(盤龍山)西砲臺下に卅五第三大隊長ニ逢ヒ、一戸砲臺二十五 珊瑚床 構築ヲ見、(東鷄冠山)北砲臺下ニ廿二聯隊本部ニ山中旅團青木聯隊長ト逢、同伴、全砲臺ヲ見ル。別レテQの坑路頭ヲ見ル」とあり、次いで「新山聯隊長ノ宿舍ニ寄り……」云々と記されてをるが、この時に問題は起つたのである。

東鷄冠山北砲臺下からQ堡壘の坑路を見、新山聯隊の占居する地點に行くには、迂回して行くか、三百メートル許り敵前に暴露して進むかせねばならぬ。そこには塹壕がなかつたからである。若し暴露して進むならば、敵の堡壘と三四百メートル位しか隔たつてゐないので、必ず狙撃せられるものと覺悟せねばならぬ。處が將軍は毫も他意なきものゝやうに「迂回せずに行かう」と二人を促すのであつた。就任した時から「……特に注意するやうに」と私かに注意せられてゐたことでもあり、又場所が場所で、明かに危険を冒すものであるがゆゑに、思はず神経は尖らねばならなかつ

た。そこで松平大尉が「迂回して行かれますように……」と諫止したが、平然として「大丈夫
ぢやヨ」と將軍は自ら先頭をも切りさうな姿勢を取るの、松平大尉も、

「それでは私が先頭に参ります。若し安全のやうでございましたならば、閣下も御出で下さいま
するやうに……」

と直ちに塹壕を出で、第十一師團の戦線に向つて駆出した、そして目指す地點に近づいて振返つ
て見れば、敵前であることを忘れてしまつたかのやうに、將軍は常の足取りで歩いてゐたのみでな
く、その後には一定の距離を置いて橋本少尉も歩いてをる。併し天祐とでも云ふのであらう、敵は
うたなかつた。

斯く三人は無異なるを得たが、心大に平かでなかつたのは松平大尉である。唯だ一人して駆足で
進み、將軍と衛兵長とが平然として歩いたことは、何だか自分のみが敵に恐怖したやうに思はれぬ
でもない。勿論、さう云ふことは差措くにしても、他日、若し將軍に斯様なことを繰返されるやう
なことがあつては、如何なる大事が突發せぬとも限らぬ。敵は二千、三千メートルの距離に於てさ
へも、騎馬姿の將官と見れば、大砲で射つ。乃木將軍は赤い帽子に白い短袴の極めて目立ち易い
服装であつたので、猶ほ狙撃せられる危険性が多分にあつた。それだけに一段と松平氏の神経を強
く刺戟したのである。

こゝに於て無異に柳樹房に歸還した松平大尉は、何とも名状し難い感情を拭ふことが出来なかつ
た。そして熟考、更に熟考したのであるが、決して黙止すべきことでなく、この機會に於て所見を
述べ、又斯くの如きことのないやうにせねばならぬと切實に感じたので、誠意を以て、

「……今日のやうなことを若し今後に於てもなさいますならば、私は副官としての任務を果す
ことが出来ませぬので、辭任を御願ひ致さねばならぬことになりました。閣下は今や全軍の形勢か
ら稽へましても、極めて重大な御身柄であり、萬一のことでもありますれば、我が帝國の前途に
も、その影響する處測るべからざるものがあります。私を心安からしめるやうな私情からで
なく、帝國のために、而して全軍の爲に、將來は決して今日のやうなことをなさらぬと御約束を
御願ひします」

と辭色激しく詰寄せるのであつた。乃木將軍は松平氏に傾聴してゐたが、勿論、その誠意は融け
るやうに將軍にも通じたことであらう。そして「何も心配する程のことではないぢやないか。儂は
危険に好んで近づくやうなことはせぬから……」と將軍は、松平大尉を優しく慰撫するのであつた
が、熟考の上にも熟考した松平氏は、何處までも其の主張を貫く決心であり、約束を迫つたので、
頻りに將軍は、

「約束しなくともいゝぢやらう。儂も危険に好んで近付いたのではない。今日は激しい交戦の後

であつたので、敵前に暴露して歩いたのぢやが、烈しい交戦の後には、静謐になつて一寸射たぬものぢやヨ。儂は経験から推して戦争の呼吸を知つてをるからしたことで、決して危険を冒したのぢやない」

と辯明に努めるのであつた。こゝに於て日記にも特に將軍は「……松平副官ノ意見ヲ述ブルヲ聞ク」と手記したのであらう。松平氏の苦諫が如何に將軍を動かしたかを察知すべきである。明治三十七年十二月二十五日と云へば、旅順の運命も將に決定しようとする時であつた。その時に將軍と其の副官との間に、以上のやうなエピソードの残されたことは、最も興味が感ぜられる。と同時に、柳樹房の日々も偲ばれるではないか。柳樹房と乃木將軍！ 思出では盡きぬ、懐かしい思出では永遠に續くであらう。

奉天戰—凱旋

◇更に北征の途へ

難攻不落の「旅順」は落ちた。完全に我が掌裡に收めてしまつたが、半歳に亘つて惡戦、苦闘した攻圍軍の將卒は、唯だ吐息する暇すらなく、北征の途に肅々として就かねばならなかつた。そこには強大な敵が準備を整へ、將に攻勢に轉じようとしてをるので、これを撃破するために、第三軍の偉力を滿洲軍の揮下に入れるのが緊要であり、眞に一日も忽にすることの出來ぬものであつたからである。

この期待に副ふべく、敏捷に第三軍は行動を起し、明治三十八年一月十五日、その一部隊は北征の第一歩を踏出したが、二十四日には乃木將軍も柳樹房を幕僚と共に出發した。考へれば、旅順を取ることが、勿論、我が軍略の上から緊要であつたが、更に北方に頻りに激増しつつある敵を撃破するは、より以上の緊要事であつた。而して強大の敵を撃破するためには、渾河及び遼河の未だ

解氷せざる前であることを必要とする。殊に當年は暖かであつたので、解氷の期も亦早からうと豫測せられてをつたゝめに、第三軍の北進は更に急速でなければならなかつた。随つて十分に各部隊は補充することも出来ぬまゝに出發した。創痍癒えずして新しい戦場に急いだのである。

乃木將軍の陣中誌した日記が一月十二日を以て中絶してをるのは、第三軍が北征の途に急速に上らうとする多忙を語るものとも亦考へられるであらうが、又一面には決死の徴とも想像せられる。武人が戦陣に望む場合に屍を馬革に包むの覺悟せざるはなく、明治二十七、八年戦役に際し、征途に就く前日の乃木氏は未だ年少であつた勝典及び保典を招き、萬一の時あるべきを諄々と語つて覺悟を促し、又其の膝下に於て養育しつゝあつた令弟の遺孤なる玉木氏——正之——にも「儂は生還を期せぬので、卿の將來の學資金も引續いて出すことが出来ぬことになるぢやらう。随つて今日から卿も決心し、學資乏しくとも、成業し得る方針を取るよにせい」と遺言したと云ふが、思出での柳樹房を出發する二日前に、乃木將軍は、山口縣長府の桂彌一氏に遺言状とも看做すべき次の手書を送つてをる。

拜啓 愈々御健勝之段大慶此事ニ御座候。小生儀も昨年来面白クもアリ、苦敷もアル日月ヲ送、貴重ノ人名ヲ夥數失ヒ、漸ク當方面丈ハ片付申 候。從レ是北進ノタメ、明日より行動相始可申、身體ハ至極頑健、乍レ憚御安意被レ下度候。扱ハ愚弟之儀ニ付而ハ、毎々御配意被レ下、難レ有奉ニ多謝候。同人儀昨夏

一子ヲ失ヒ、小生ノ愚息兩人モ戦死相送ゲ 候ニ付、男系絶滅ニ至リ 候次第、之レトテ格別無ニ差障事ニも候得ド、愚弟儀ハ未ダ老ボレ 候迄ニモ無レ之ニ付、何カ相應ノ結婚出來候得バ、御盡力奉レ願 度候。素方男爵ナドハ小生一代ニテ返上仕リ、愚弟ハ他家ヲ冒シ、血統丈ケ殘シ置候得バ宜敷事ニ存候。(中略) 就テハ家産トテモ無レ之候得共、小生ノ死後ハ、弟妹及ビ男系姪等へ相分ケ可申、其内愚弟ニ殘シ、先祖ノ墓ト遺物ノ保護可ニ相托ト存候。何卒此邊御推察被レ下、從來相願置 候事ニ相加へ、御斟酌奉レ願 候。過日ハ三兄御連書難レ有拜誦仕 候。御序之節宜敷御傳聲 奉レ願 候。先ハ御禮御願迄申々。時下折角御自愛奉ニ專祈候。頓首

一月二十二日
桂賢兄尊下

希 典 拜

この手書の中の(中略)となつてをる處は「……男爵家は斷絶するも、他年、頭角を抽でる人物を以て乃木の名跡を繼がしむるも一興か」と云ふ意味のものであるといふ。尤も將軍が凱旋の途を長府に訪れて面晤した時、桂氏が「あの事は如何なさる？」と問ふた場合に、將軍は「取止めにする、儂の死後の乃木家は斷絶ぢや」と力強く語つたが、明治四十年九月二十一日、勳功に依つて伯爵を陞授せられ、後に祝賀の宴の挨拶の中にも「……私に勳功があつたと申す次第でなく、唯單に私が年長であつたゝめに、第三軍の代表として此の榮譽を忝ふしたまでのことでありませう」云々

とあり、以て決意を窺ふべきであらう。

乃木將軍は絶えず旅順に在つて「死處」を求めたにかゝはらず、幕僚の厚い注意と裕かな天祐とは、その目的(?)を達せしめなかつたが、北進して後も、依然として「死處」を求めてゐるかに村度せられることが少くなかつた。旅順開城の翌々日——明治三十八年一月四日——時の陸相であつた寺内氏(正毅、後の元帥)に寄せた書柬の如きも、力強く其の心事を語つたものであらう。次のやうに……。

新年ノ御慶目出度申納候。然バ久々御無音ニ打過候處、實ハ彈丸ト人命ト時日ノ多數ヲ消費シツ、埒明キ不レ申候爲メ唯々苦悶、慚愧ノ外無レ之、漸ク須將軍モ根氣負ケノ氣味ニテ開城致シ吳レ、當方面ノ一段落ヲ得候。無智無策ノ腕力戰ハ、上ニ對シ、下ニ對シ、今更ナガラ恐縮千萬ニ候。山元帥より度々懇示も相蒙リ候得共、是又御答も不レ仕、多罪至極、且ツ詩ノ次韻も未ダ出來上リ不レ申爲メ、今日ハ呈書不レ仕、乍レ憚尊臺方前件宜敷御取成シ置キ奉レ願候。明日ニテ人馬、諸材料、物件受取渡相濟、八日ニ戰死者ノ祭典致候テ、直ニも北進可仕事ニ夫々準備罷在候。此次ハ野戰ノ趣味充分賞觀可仕相樂居候。

○又々例ノ服制ノ儀申上候ハ御笑ヒニも可有レ之候得共、平時ニ於テ無益ノ金ヲ掛ケ不便極ル觀、弄品ノ實戰ニ有害ニシテ、終ニハ軍容も、軍紀モメチャクナラシムルノ止ムヲ得ザル醜體ハ、何卒此際御改正

相成度、前條餘リ過言ノ如ク御怒りも有レ之可レ申候得共、精神教育ニも質素ト實用ト、又軍紀ヲ維持スルニモ齊一ト申ス事ハ不可レ欠儀ト存候。今後幾年月ノ戰爭ヲ繼續スル爲トノミ申スハ其意ヲ得ズ、砲臺ノ一時止ミタル時ハ、軍人ノ衣服も諸材料も、非軍事精神ト相成ラヌ様無レ之而ハ不便、不利益乎ノ様に被レ存候。御參考迄申上置候。

○愚息等戰死之際ハ特ニ御懇情被レ下候由、多謝ノ至ニ御坐候。御禮申上候。先ハ久々御無音之謝罪旁々例ノ冗言迄不レ惡御一讀奉レ願候。恐々敬具。

三十八年一月四日

希 典 拜

寺内賢兄閣下臺下

「彈丸ト人命ト時日ノ多數ヲ消費シツ、埒明キ不レ申爲メ唯々苦悶、慚愧ノ外無レ之」と告白し、且つ「無智、無策ノ腕力戰ハ、上ニ對シ、下ニ對シ、今更ナガラ恐縮千萬ニ候」と恥入つたのみでなく、又更に「……此次ハ野戰ノ趣味充分賞觀可仕相樂居候」と記した心事は、親友の寺内氏に犇々と考へられるものがあつたであらう。第二軍の高級副官として乃木將軍の信頼深かつた吉岡少佐(友愛、後の大佐)が中佐に進み、第六聯隊長に榮轉し、その後任として塚田中佐(清市、後の大佐)が東京を出發する時、寺内陸相が第三軍の幕僚に窃かに傳言したのは「乃木を殺さぬやうにしてくれヨ」と云ふことであつた。乃木氏の爲人を知る親友には、端的に其の心事が察せられ

たがためでなければならぬ。

殊に旅順を取ると同時に、第三軍の首脳は總て更迭せられるであらうと云ふ風評が頻りであつたのみでなく、司令官の乃木將軍も亦罷免されるらしいとの流説すらもあつた。事實に於て軍部に此のことが云爲されたかも知らぬ、併し限無き我が陛下の御信任は、乃木將軍にあつたではないか。「海の東郷」と「陸の乃木」とを動かすことは出来なかつた！そして更迭説は霧散したが、骨を馬革に包んで陛下に謝し、國民に應へようとする熾烈の乃木氏の念願は、北征の途に肅々として上る當時から更に赤熱し、白熱化したのであらう。

かう云ふやうに記述する中にも、思出でられるのは「海の東郷」と「陸の乃木」とが檜舞臺の柳樹房で會見した日のことで、明治三十七年十二月二十日の乃木將軍の日記に「午時、東郷海軍大將、參謀秋山中佐外壹名ト來營、今後作戰ノ目的ニ付相談ス。午食後、大庭中佐誘導、火石岑子ニ徒步行、夜ニ入り歸來……」とあるが、この日の兩將の會見は、眞に劇的のシーンであると共に、素晴らしい歴史的のものであつた。旅順未だ攻陥し能はざるも、二〇三高地を既に奪取し、港内深く蟄伏してをつた敵艦を殆んど撃破し、残るものは僅少となつたので、東航中のバルチック艦隊を邀撃すべく、我が海軍は其の準備をせねばならぬ。勿論、既に準備に怠りなく、聯合艦隊は第三艦隊の一部を残して監視せしめ、他は修理、補充を急ぎつゝあつたが、戦艦八隻、装甲巡洋艦三隻、装甲海防艦三

隻、巡洋艦六隻、驅逐艦九隻、特務船九隻の合計三十八隻十五萬餘噸の威力を有するバルチック艦隊を死の海底に葬るべく、銳意しつゝあつた「海の東郷」は「陸の乃木」を訪ふた。思出での柳樹房に二人の生きた英雄は會つて沁々と語つたのである。

「海の東郷」は「陸の乃木」と將來の作戰上に遺漏なき相談を試みて午食したが、東郷大將の相談に對して乃木將軍は「旅順の方は心配なさらぬやうに、私が引受けるから」と答へ、食後「海の東郷」は火石岑子の海軍陸戰重砲隊を訪ふことになつた。柳樹房から火石岑子へは一里餘もあるの、馬背を借らねばならぬが、「海の東郷」は乗馬に巧みでなかつたので、乃木將軍の日記のやうに「大庭中佐誘導、火石岑子ニ徒步行」した。そして歸來したのは夜の九時であつたが、夜食を終り、兩將更に快談し、「海の東郷」が柳樹房を辭去したのは、漸く最終の汽車に間にあふ夜半の十二時近くであつた。長岑子のステーションまで見送つて來た「陸の乃木」は、將に列車の發しようとする直前に「海の東郷」と握手して、

「再び御目にかゝる時があれば、君國のために御目出度いことで、その時を期待します。御身體を大切に！」

と凝視し、或る決心を示すものゝやうであつた。瞑想しつゝ「海の東郷」は、拙著「乃木希典」のために「靈德巍然」と題したが、その時の光景が偲ばれるではないか。

◇乾坤一擲の快戦

明治三十八年一月二十四日、思出で深い旅順——柳樹房——を出發し、北征の途に肅々として就いた乃木將軍は、黑溝臺會戰の殷々たる砲聲を聞きつゝ、翌々日に遼陽に入つたが、こゝに滞留して軍容を整ふること約一箇月、二月二十七日から乾坤一擲の奉天戰に参加し、全力を傾けて祖國のため盡すことになつた。

奉天戰！奉天會戰は未曾有の大戦であつたが、戦前に「日本勝つべし」と斷定し得るものは、皆無（に非ざるも、極めて少數）であつた。當時に於けるロシアの陸軍は世界一を矜持し、猶ほ獨逸すらも之に一籌を輸する實情であつたがために、開戦と共に、我軍が文字通り連戦、續捷し、クロバトキン將軍が些の臆面なしに豫定の退却に次ぐに退却を以てしても、露西亞が奉天に向つて兵力を集中し、攻勢に轉じようとする形勢が明かになると同時に、「露軍勝つべし」とするものが又更に多くなつた。疲労と缺乏とに悩みつゝある日本は、悲哉、一日と露西亞のために壓迫せられ、勝敗の地位必ず轉倒するであらうと稽へられた。そして奉天戰は世界に於ける異常の注目の下に、緊張し切つた状態の裡に開始せられたが、如何に彼我の兵力に徑庭があつたかは、次表が之を雄辯に語つてをるのである。

種別(單位)	日本	露西亞
歩兵(大隊)	二四〇〇	三七九・五
騎兵(中隊)	五七・五	一五一・一
工兵(中隊)	四三・〇	四三・五
砲(門)	九九二	一、二一九
機關銃(挺)	二五四	五六
師團數	一九	三〇・五
戰鬥員(人)	二四九、八〇〇	三六七、二〇〇

(備考) 露國側の騎兵一五一・一とあるは百五十一中隊と一小隊を表示する。

又更に露軍側は如上の兵力のみでなく、本國から歩兵四十八大隊、騎兵四十二中隊、砲兵三十六中隊を輸送中であつたが、クロバトキンは此の増加すべき兵力を其の手中に收める以前に速かに我軍を撃破しようと云ふ意圖であり、積極的の行動を開始して頻りに我軍に壓迫を加へたのである。この敵と對峙した我が兵力は實に前表の如きものであつたが、考へれば、當初に於ける日本の對露國の打算には見込み違ひのあつたことが明瞭した。と云ふのは——シベリア鐵道に依つてロシアの滿洲に輸送し得る兵力は——單線であり、且つバイカル湖は汽船を用ひるので——三十萬を越えることはないであらう。假令其の本國に夥しい兵力を擁しても、この滿洲に向つて集中する三十萬を撃破し、續いて輸送せられるものを更に潰滅せしむれば恐るべきでない」と結論し、この結論

を正しとするものが多数であつたからである。

然るに實際に於ては左様でなく、この結論の正しくないことが明了した。見よ、バイカル湖の汽船を用ひて連絡しつゝあるを廢し、岩石の重疊する湖畔を開鑿して線路を敷くことに成功し、シベリア鐵道は直ちに滿洲と露本國とを連絡してしまつたではないか。更にシベリア鐵道に依つて輸送する軍隊の乗つた列車が目的地に到達すると共に、空車の儘に本國に之を送還し、再び軍隊の輸送用たらしむることなく、使用して其の用途を了ると同時に、惜氣もなく之を破毀し、又更に新しく裝備した列車を以て輸送したので、日一日と滿洲に露西亞の兵力は激嵩し、我に倍加するのみでなく、三倍するの日も亦遠くないであらうと云ふ形勢になつた。當時に於ては、このことを國民に知らせしめず、今日に於ては「過去のことだから……」と左して問題とするものもないが、明治三十八年二月から三月に於ける我國の爲政者、軍部の最高部には、これが異常の惱みであり、「皇國の興廢此の一戦にあり」の感切實であつた。萬一にも奉天戦に敗者となれば、我が日本の前途終に暗黒あるのみであつたからである。

唯だ兵力に於て我國が露西亞と比較し、大なる遜色があつた許りでなく、既に旅順の攻圍戦（のみでなく、到處）に於て經驗したやうに、兵器に於ても、我軍はロシアに及ばず、更に用意の足らなかつたことも事實であつた。兵力に於て不足し、兵器の質及び量は遜色があるにかゝはらず、

昂然として露西亞に優越し、猶ほ光榮ある勝利者の地歩を譲るまいとする。何を皇軍は恃み、倚賴したであらう？ 勿論、祖國愛に灼熱する日本人としての意氣があつた。スラヴ魂を克服する日本魂あるのみであつた。

殊に左翼にあつて士氣振へる乃木將軍の第三軍は、滿洲軍としても倚賴する處異常であつたが、敵の畏怖することが甚だしかつた。「乃木軍到る！」の報道は、敵將クロバトキンを竊かに戰慄せしめたのみでなく、總ての露軍の色をも容易に失はしむるものであつた。然るに當時の第三軍の兵力は第一、第七、第九の三個師團を主力とし、後備歩兵一旅團半、騎兵、砲兵各一旅團から成立してゐたが、戰鬥人員は四萬五百人！ 二個師團だにも足らぬ貧弱なものに過ぎなかつた。恃むは四萬五百の旅順に於て苦闘したスチールのやうな戰鬥員を中堅とするのみであつたのである。

かう云ふやうな状態で第三軍は北進し、奉天戦に参加することになつた。そして二月二十八日に軍司令部は小北河を出發し、敵の騎兵を驅逐しつゝ、渾河と遼河の間を邁往したが、三月一日には、右翼の第九師團が四方臺を攻略し、軍としても、總司令官の定めた作戰計畫上の第一の目的線——大民屯から小民屯を連契する線——を占領したので、今や奉天に向つて堂々と乃木軍は正面するこ

とになつたのである。然るに如何にしても第三軍と總司令部との連絡が取れぬ。第三軍の電線は、久しく旅順に於て風

雨に曝され、損傷した不完全のものであるのみでなく、それを「露探」が切るので、左無きだに、通話が面白くなかつたのであるが、友軍の状況は、前日來の攻撃が毫も進捗せぬと云ふことが明了してゐたのみで、その後のことは電線が役だゝぬやうになつたので不明である。孤立と同じ立場に置かれた第三軍は、總司令部からの命令を受けることも出来ぬので「如何にすべき乎」と困惑したが、冷かに戦局より判じ、冒険であつても、一路直ちに邁往し、奉天に向ふことに乃木將軍は決心した。不完全な地圖に依ることであり、彈藥や糧食が續くか疑問であつたが、司令官としての乃木將軍は「孤軍直ちに奉天を衝く」て決心をなした。斯くすることが戦局を吾に有利に導く。この爲或は第三軍は全滅するやうなことになるかも知れぬが、我が全軍のために之が有利であると判断したからである。

この決心を聞いた幕僚は司令官を凝視し、又互に顔見合せて言葉もなかつたが、纏て討議の結果は「司令官の決心が適當である」と云ふことに一致し、且つ「……成否の御受合ひは出来ませぬが、將卒が最後の一人まで戦ひましたならば、假令第三軍が全滅しましても、全滿洲軍の得る利益は必ず甚大でありませう。何卒十分の御覺悟で斷行して下さいませう。而して萬一にも不成功でありました場合には、閣下、冀くは御腹を御召し下さい。私共も俱に御供を仕ります！」と異口同音に述べたが、その時に將軍の顔には、如何にも快い微笑があつた。併し幕僚に取つては「……

過激に涉つて、強く申上げ過ぎた」との悔恨がないでもなかつた。

その夜半——三月一日——になり、第九師團の架けた裸線をも以て總司令部と第三軍の連絡は偶然取れたので、直ちに通話した。處が「奉天に孤軍直ちに邁往するのは甚だ危険ぢや」と總司令部では不賛成であり、中止せしめようとしたのであるが、夙に命令を發し、その一部は既に行動を起した以後であつたがために、如何ともすることが出来なかつた。そこで總司令部でも「さう云ふことなら萬已むを得ないが、注意するやうにせい」と辛じて承認を與へたので、翌二日は晴々たる白雪を蹴つて奉天に向ひ、午後には沙岑堡に優勢の敵と遭遇し、乃木將軍は第一線——沙岑堡の南——丁許の墓場——で夕刻まで軍の統帥に任じたのである。

力戦更に力戦したが、勝敗未だ決定せず夜となつたので、乃木將軍は沙岑堡に宿營すると云ふ。勿論、この地方でも沙岑堡は第一の大きな部落であつたが、彈丸は文字通り飛來して甚だ危険である。如何に危険であつたかと云ふことは——監理部長の渡邊中佐（満太郎、後の中將）の指揮下に設営してゐた——三等獸醫の森清克（後の二等獸醫）が負傷し、遂に双眼を盲した事實に依つても了知し得るであらう。さう云ふやうに危険であり、不適當の場所であると考へられたにもかゝらず、將軍は「泊る！」と決心を明かにしたので、そこに設営して司令官も、幕僚も泊ることになつたのである。

◇「死」を必期して

乃木將軍が「泊る」と頑強に唱へて設営した沙岑堡は、奉天から四里餘の地點であり、露軍が糧秣その他を集積した處であつたがために、退却と共に逸早く火をはなつたので、我軍の入つて設営した時には、焔々と燃えて凄惨の狀であり、彈丸は頻りに飛來するにもかゝはらず、幕僚は此の混亂の裡に翌日の計畫を進めてゐた。そこに司令官の專屬副官であつた松平大尉が訪れ、如何にも心配相に、參謀副長の河合中佐（操、後の大將）に、

「司令官の居間に小銃彈が頻々とやつて來るので、他に御移り下さるやうに御願ひ致しても、御聞入れになりませぬ、如何致しませう」

と訴へるのであつた。勿論、かう云ふ場合に並大抵のことで將軍を動かせるものでない。それを心得てをる河合中佐は、如何にも無造作に、

「それでは、今、幕僚は參謀長と明日の計畫をたてゝゐますが、略ぼ計畫も立ち、適當の處に地圖も展いてありまして、都合がよろしうございますから此方においてを願ひます——と申上げてくれ給へ」

と答へた。然るに副官が歸つて報告すると乃木將軍は幕僚のゐる室に悠然と訪れた。この部屋に

は敵の銃丸を避ける圍壁があつたので、漸く安全なるを得たが、沙岑堡そのものが最初から決して樞要の司令部を設置すべき處でなく、移轉せねばならぬと考へられた。併し「危険だから……」と云ふ理由のみで司令部の移轉に、快く將軍の同意の得られないことは諒會せられてをるが、冷靜な頭で計畫を練らねばならぬ幕僚としては、かう云ふ場所でない、考への出来るものでない。そこで夜の十時過ぎ、漸く翌日の命令を受領者に手交し、煙草を手にして河合中佐は、

「あゝア、かう云ふ場所にては、迎も幕僚の仕事は巧く出来ぬ。困つたことだ！」

と獨語した。當時の河合氏は參謀副長であつたが、參謀長は病氣であつたので、責任も重かつたその人が斯様に歎じたので、乃木將軍は河合氏を凝視してゐたが、その胸中を直ちに察知したものは、

「それぢや直ぐ後退しよう。何處へでも行くヨ」

と微笑しながら促すのであつた。その時が午後の十一時に近かつたにかゝはらず、直ちに後退と決し、第三軍司令部は約一里の後方の小部落に移つたが、天祐とでも云ふのであらう。沙岑堡には翌朝、頗る優勢の敵が逆襲し、文字通り砲彈の巢になつてしまつた。若し後退せず、司令部を設置したまゝであつたならば、その結果は甚だ憂慮すべきものであつた。

勿論、この日——三月三日——の戦ひは非常に易く優勝するを得、樂々と敵を撃退してしまつた

ので、旅順の攻圍戰に苦惱した將卒達に「フム、野戰と云ふものは斯様に樂なものか」と感念せしめ、大に士氣が振つたのみでなく、未だ準備の十分に整はなかつた敵軍を抑へる結果ともなり、乃木將軍が孤軍直ちに奉天を衝くの策戰を立てたことの機宜に適へるを立證して餘りあるものであつたのである。

斯くて四日の第三軍は、總司令官の命令で、前進を一時中止し、五日には司令部を後民屯にすゝめ、その第一線は大石橋、李官堡、張士屯の地點を連ね、奉天を去る二里の線に進出し、各部隊は終日健闘したが、敵は堅固な工事を施し、頑強に抵抗するので、勝敗未だ決定せずして夜となつた。第三軍は第二軍の前進に伴ひ北方に移轉することとなり、右翼第九師團のゐる地點に、第二軍の令下に屬した第三師團を進出せしむることになつた。かう云ふことが演習の際であれば、敢て困難でないが、時は猛烈に敵と砲火の應酬中であり、土地は不案内であつたので、この蟹の横這的行動は頗る困難、且つ危険であつた。

乃木將軍は幸に左翼第一師團の前面には未だ敵が左程に多くないので、これを先づ北方に移し中央にゐる第七師團は強敵を控へてゐるがために移動せしめず、第九師團は第三師團と交代して後に第七師團の背後を透らせて第一師團のゐた場所に嵌込むこととした。斯様な運動は、この日のみでなく、九日に乃木將軍は大膽にも再び第九師團を第一師團の左翼に移したが、六日の此の運動を

敵も察知したか、第七師團を猛烈に攻撃し、將に堤防の潰えるやうな危地に臨んだが、野砲兵旅團の勇敢なる應援と第九師團の進出に依り、第七師團は危地を脱した。かう云ふやうに奮戦して第三軍は奉天の西北方に進出し、敵の背面に迫つたのである。

第三軍にとつて最も思出での多いのは七日であつた。明治三十八年二月下旬から奉天に向つて進撃した我が滿洲軍は、最右翼の鴨綠江軍、次いで第一、第四、第二の各軍何れも全線に亘つて力攻しつゝあつたが、豫定の如く進捗せぬので、總司令官大山元帥、總參謀長兒玉大將の苦衷は、殆んど想像の外にあつた。四十里の戦線、六十一萬七千餘の兩軍の對抗……。我軍の補充力の貧弱、と云ふよりも、空乏に比し、敵は一日より一日と新銳を加へ、攻勢に轉じようとする。三月七日は我軍に取つて危険の迫つた當日で、今にも逆襲に敵は成功し、攻守俄かに一轉して我軍の總退却となるかも亦測り難い形勢さへも見えたのである。

如何に此の七日に我が將卒か惡戰、苦闘したかを語るべき實例は、第六聯隊の全滅である。滿洲軍の總豫備隊から第二軍の令下に入つた第三師團は、第三軍の右翼に在つて健闘しつゝあつたが、その第三師團に屬する第六聯隊は第一線に進出し、李官堡を奪取した。然るに優勢の敵は逆襲に出で、第六聯隊は終に包圍せられ、聯隊長以下一兵を残さず全滅してしまつた。その聯隊長の吉岡中

佐（友愛、後の大佐）は、旅順の攻圍中に乃木將軍の下に高級副官であり、最も信頼を受けた精神家であつたので、部下も之に感化せられたものであらう。或る大隊長は割腹して仆れ、兵は散兵した儘に戦死してをつたと云ふ壯烈なものであつたのである。

又更に第三軍の右翼にあつた後備旅團の如きも亦其餘波を受けて遺憾ながら一部分が潰亂し、血だらけになつた旗手が駈り軍旗を捧げて軍司令部に駆け込み、後退しようとする味方を旅團長が軍刀を以て斬捨てると云ふ凄惨なものであつたが、勿論、第三軍は苦戦に陥りながらも力戦し、全線に亘る形勢を大に有利に導くべく最善を盡しつゝあつた。併し終日の大努力も奏效せずして夜になつた。夜半の十時過ぎであつたらう。總司令部の參謀松川少將（敏胤、後の大將）が電話で、第三軍の作戰主任（白井中佐）を呼び「……何を愚圖つてをる？ 本日の第三軍の攻撃は鈍かつたぢやないか、軍司令部はもつと前方に出て積極的に督戦せねば駄目ぢや」と通話してをる中にけたまはしく電信機は響く。受信したのは「本日の第三軍の攻撃は遅緩たるを免かれず、更に奮勵、健闘し、以て目的の達成に努むべし」と云ふ意味の訓令である。

「……何を愚圖つてをる？」とか、或は「本日の攻撃は鈍かつた、駈りやれ！」とか、又更に大に非難がましい訓令となつては、倦まず健闘しつゝある第三軍の幕僚も悲憤の涙を抑止し得ぬ。又況んや司令官をやである。總司令部から此の訓令あると共に、乃木將軍は沈痛に考へつゝあつた

が、直ちに第三軍の全員に此のことを布告したので、揮下の各部隊は「……吾々は眞に全力を盡して奮戦してをる。これでも攻撃が鈍いと非難されるならば、一人残らず戦死し、司令官に御詫びするより外はない！」と憤激するに至り、士氣の振ふことも名状すべからざるものがあつた。全軍の將卒「死！」を必期して敵を撃破しようとする烈しい意氣に燃えたのである。

◇ 武士道を如實に

全軍皆な憤激して「……一人残らず戦死し、司令官に御詫びするより外はない！」と七日の夜から九日に掛けて一段と第三軍の士氣は振つたが、八日の朝に開始した我が攻撃は、實に壯烈そのものであつた。と同時に、敵の砲彈が司令部——新民屯街道の大石橋——の駐屯する處に飛來し、豫備隊に命中するのみでなく、各師團の幕僚は司令部からの電話を聴くために室外に出れば、狙撃されると云ふ接戦であり、勝敗の數は豫斷を許さぬものがあつた。そして一角が若し潰裂すれば、萬事休するの危機に瀕しつゝあつたのである。

第三軍の大石橋の司令部は、民家の狭い一室にあつたが、そこに司令官も、幕僚も一緒に仕事をしてゐた。處が悠然と報告を受け、戦況を判じてゐた乃木將軍は、俄かに思出したものゝやうに立ち、如何にも無造作に、

「儂は一寸出かけるから馬を……」

と副官に命じ、外出しようとする。時は午前の八時頃であつた。豫て將軍の行動に深く注意してゐた幕僚達の神経は尖つたが、殊に一段と責任重き河合中佐は、

「不可ませぬ。只今は第三軍の危急存亡の時、御坐いますので、軍司令官が此處を御動きになつてはなりません」

と之を諫止したが、將軍は軽く點頭しながらも、猶ほ「イヤ、そこ迄一寸行つて直ぐかへるのぢやから……」と馬の用意を命ずるのであつた。河合中佐は文字通り緊張して「不可ませぬ」と頑強に之を阻止した。その時に部屋隅に横臥し、うとくしてゐた重態の參謀長——松永少將（正敏後の中將）は、電氣にでも打たれたやうに不意に立ち、

「河合が只今申しあげたことは、最も至極でまいます。閣下が此の際茲を御離れることは、斷じて不可ませぬ。若し如何にしても御出掛けにならねばならぬもので御坐いますならば、私は病中でありますが、閣下の御代理をいたしませう」

と悲壯に述べるのであつた。第三軍參謀長松永少將は、軍が奉天に向つて攻撃を開始する以前から胃腸を害し、日一日と病勢は悪化するのみであつたが、當時は更に黄痘を併發して熱も亦高く、終に重態に陥つた。そこで後方に歸つて入院するやうにと勸告せられたにかゝはらず、頑として承

引せず「この戦ひは帝國の運命を決するものであり、第三軍は特に重大の任務を荷つてをるので、是非軍と行動を共にしたい。若し途中で仆れるやうなことがあれば、武人として寧ろ本懐である」と泣いて行動を共にしようとする。乃木將軍は其の衷情を憐んだものであらう。強ひて歸らしめようともせず、氣儘にさせてあつたが、重態に陥つて職務が執れぬやうになると同時に、松永少將は參謀副長の河合中佐に「儂は病氣ぢやから君に萬事を頼む」と依頼したので、河合中佐からも既に記述したやうに、寺内陸相が塚田氏の赴任に際し、第三軍の幕僚に「……乃木を殺さぬやうにしてくれヨ」との傳言のあつたことや自分が滿洲軍參謀から第三軍の參謀副長として赴任する際、大山、兒玉の諸將達から申含められてゐたことを語つて「乃木將軍の御身邊に萬一のことがありませんる場合には、到底私の微力では致方がまゝいませぬので、閣下の御配慮を御願ひします」と懇請し參謀長も「承知した、必ず微力を盡すから……」と應諾してゐたので、こゝに然諾を重じて決然かう云ふ申出でをしたのであらう。挺身して司令官の代理をしようとする病中の參謀長の心事に對して、幕僚は強く感激し、涙ぐましい劇的シーンを描いた。そして沈黙は室を占領してしまつたのである。

松永少將が「……私は病中でありますが、閣下の御代理をいたしませう」と起上つた時、乃木將軍は「ウム」と參謀長を凝視した。外には銃聲、砲聲が烈しく、戦ひは次第に白熱化する。

總て將軍が「いゝのですか、行けますか」と不安さうに問へば、力強く參謀長は「大丈夫で御坐います」と答へた。こゝに於て將軍は漸く決心したらしく、

「……御氣の毒ぢやが、君に御願ひすることにしよう」

と快く依囑するに至つたが、何の要件を以て將軍が參謀長に代理を託したか、又更に參謀長も如何なる目的の下に外出するのか、双方共に説明せず、問ひもしなかつた。そして參謀長は病驅を危く同僚に助けられて馬上の人となり、司令官附の衛兵長と傳騎を従へ、痛ましくも第一線に向つたが、見送る將軍の眼には熱涙があり、幕僚も皆な俯向いてしまつた。顔を得上げるものはなかつたのである。

旅順の攻圍中にも、乃木將軍は屢々親しく戦線に到つたが、それを幕僚が諫めて「危険な處に御出でになるのは宜しく御坐いまぬ」と云へば、將軍は事も無氣に「ウム、儂は危険な場所を除けるのが上手ぢやから少しも心配はないヨ」と笑つてゐた。……と云ふやうなことを承知してゐる人々も、今、將軍が自ら戦線を巡視しようとするのを默視し得なかつた。殊に七日には「第三軍の攻撃は遅緩たるを免かれず……」と總司令部の訓令があり、これを全軍に布告し「一人残らず戦死し、司令官に御詫びしよう」と激越してゐた時であるがために、將軍が「一寸馬を……」と戦線に出よ

うとするのを河合中佐が阻んだのも當然であり、これは幕僚の一致した聲であつたのである。旅順と奉天とは同一に見ることが出来なかつたから……。

乃木將軍は戦況を判じ、今の場合は「各師團長と親しく面晤して督勵することが何よりも必要である」と考察したために、馬の用意をも命じたものであらう。又此の際に戦線に於て將軍自ら督戦することは、必ず効果も多かつたに相違ない。併し「萬一のことがあつたならば……？」第三軍に影響する處甚だしいのみでなく、戦局の總てに不利となるは、改めて説明を須ひぬ。こゝに於て河合中佐の切諫となり、病中の參謀長は乃木將軍の意圖を諒すると同時に、河合氏の苦衷を察し敢然と司令官に代理して第一線を巡視することになつたが、第一線では松永少將の病中であることを夙に承知してゐるので、

「君は病氣ぢやらう。それに責任の重い地位にゐるぢやないか。歸れ、吾々は皆な最善を盡してゐるのだから……」

と却つて慰藉せられ、總ての戦線を巡視するに至らずして歸還したが、松永少將は此の大任を果すと同時に、病氣が愈々重くなつて司令部と同一行動が出来なくなつた。軍司令部は九日に大石橋から造化屯に移駐したが、この日は暴風で、文字通り黄塵萬丈の暴風中にクロバトキンは歩兵七十二大隊、砲百十二門を以て乃木軍の突破を試みたが、この敵襲にも堪へた。そして第三軍は次第に

敵を壓迫したが、造化屯では、我が病院が敵の砲火に焼かれ、軍の幕僚が手傳つて彼等の傷者を救出すと云ふ急迫した場面もあり、又更に某後備旅團は敗退し、その餘波を受けて遺憾ながら第一師團の第一線も後退の餘儀なきに至り、その後方には我が砲兵旅團が放列を布きながら一弾をも放つことが出来ずにて危険は迫る。午後二時頃、第九師團から「豫定のやうに第一師團の左翼道義屯に到着したが、戦闘人員は二千五百人」と云ふ報告があり、堂々たる一個師團の兵力が平時の一聯隊にも亦足らぬ實情であつたが、軍の參謀——山岡中佐(熊治)——が負傷したのも、第九師團司令部に於てであつたのである。

翌十日は快晴であつた。我軍の爲に壓迫せられた敵は、終に戦線を維持するを得なくなつたので汽車に投じ、線路に沿ひ、道路に依つて鐵嶺に向ひ、退却を始めた。勿論、第三軍は之を遮断せねばならなかつたが、敵は鐵道に沿ふた部落の圍壁に依つて我軍を防ぎ、味方の後退を容易ならしめてをるのみでなく、屢々逆襲するので、乏しい兵力を以てしては、遮断も不可能であり、唯だ腕を扼して長蛇を逸した。併し奉天は此の日我が軍の占領する處となつたのである。

奉天を我が掌裡に收めた。こゝに於て驀然と滿洲軍は全力を擧げて追撃に移つたが、十一日の朝乃木將軍は松永少將を病床に訪ひ、

「最早戦ひは結了した。直ちに後方へ歸つて加療することにしたが宜しい」

と顔に微笑があつても、嚴かに命令した。處が氣丈の參謀長は「御蔭で餘程好くなりました、御一緒に御伴いたします」と元氣を示さうとするのであつたが、乃木將軍は八日に於ける態度とは全く別人のやうに、

「不可、歸つて十分に身體を癒すのぢや」

と重ねて命令した。そして追撃戦のため幕僚が將に出發の準備にかゝつてをる忙裡に將軍自ら擔架を命じたが、司令部には擔架がなかつたので、民家の門扉で之を急造せしめ、

「フム 出来たか。併し松永は肥つてをるから頑丈に造らぬといかぬ」

と將軍は運ばれた擔架に乗つて仔細に檢し「これならいゝぢやらう」と満足らしく見えたが、かう云ふやうにして病中の參謀長は後送されてしまつたのである。

敵を追撃して司令部が桃樹子に宿營した十一日の夜、乃木將軍は河合中佐を招き「八日に儂が松永を戦線にやつたのを何と御考へか」と沁々と問ふたので、中佐は極めて率直に「私は残酷だと思ひました。重態の參謀長を戦線に御出しになるのは、御氣の毒だと同情に堪へませぬでした」と力強く答へた。然るに將軍は「ウム、左様ぢやつたらう」と點頭き、

「重態の松永を儂の代理として第一線にやつた時には、誠に斷腸の思ひぢやつたが、前夜既に軍醫部長の落合(泰藏、後の軍醫總監)から到底快くなりさうにないと聞いてゐたので、松永を疊の上で殺さず、好い死處を與へてやらう……と心強く儂の代理として戰場にやつたのぢやヨ」と其の心事を明かにした。絶えず「死處」を求めてゐた將軍なるがゆゑに、病みて恢復の望みなかるべしとせられる部下のために、この配慮をなしたのであらう。彈雨の間に光輝あるロマンスは、かう云ふやうにして永遠に残されたのである。

◇法庫門ロマンス

奉天戰に皇軍は勝つた。光榮ある勝利者の地位を占めたが、戰爭は未だ結了したのではない。三月二十一日、敗北者としての敵將クロバトキンは、滿洲軍總司令官を罷免、第一軍司令官に補せられたが、代つて第一軍司令官のリネウキツが總帥となり、一日と激昂する其の精銳を提げて攻撃に轉ずる機會を狙つてゐるので、我軍も之に準備し、攻撃策を力強く樹てることになつた。新しき戰場は果して何處ぞ？ そこに大決戰は復行はれなければならぬ。

乃木將軍の第三軍は四月に入つて遼河を涉り、五月には蒙古境に進入し、その五日に軍司令部も法庫門に移駐したが、「勇猛の乃木軍」の前進を阻み、味方の準備に支障なからしむる作戰上から敵

將ミシチェンコは、その指揮する騎兵團を駕御して第三軍の背後を衝かうとした。ミシチェンコの驍名は夙に我軍の間に噴甚し、その統率する胡胡隊の襲撃は、大に脅威ともなつてゐた。ミシチェンコの胡胡隊は騎兵四十四中隊、砲六門、機關銃二挺、總兵力五千五百餘を遼陽窩棚に集中し、頻りに機會を狙ひつゝあつたが、五月十六日、太平街附近に進出し、十七日には愈々行動を開始した。そして十八日には倪家窩棚に於て我が第七師團の第二野戰病院を焼き、三臺子では彈藥大隊本部、砲兵彈藥縱列を襲撃し、到處我が電信線を切斷して大房身に南下した。

この大房身と乃木將軍の駐營中である法庫門とは、三里餘の距離しかないので、胡胡隊が侵入して支那人の部落を焼く凄慘の狀は、我軍の何れからも望見し得る。各部隊は應戰したが、敵は勇躍して更に南下し、第三軍の背面を衝く作戰であることが明かになつた。當時の法庫門には兵力も乏しく、襲撃を受ければ危険であつたので、軍司令部を何れにか轉移することにせねばならぬと考へられた。こゝに於て當時の參謀長であつた一戸少將(兵衛、後の大將)は、

「暫時他に御移りを願ひます」

と進言するに至つた。時に砲兵部長の牟田少將(敬九郎、後の中將)と圍碁を興じてをつた乃木將軍は、參謀長の進言が耳に明確に入らなかつたのか、又或は他に轉移すると云ふやうなことの必要がないと認めたものか、平然として、

「かうなつては退く譯にはまゐらぬ！」

と石を悠々と握り、盤面を睨んで、そこに敵襲もなければ、ミシチェンコモ、又更に胡朔隊の存在もないやうであつたが、同時に、有力な敵の來襲にも、我軍の應戰漸く奏效し、二十一日には金家窩棚方面を指して敵將ミシチェンコは退却したので、法庫門は危機を脱したのである。

ミシチェンコの胡朔隊は、快速に第三軍の背面を衝く作戦であつたにかゝはらず、不成功の儘退いたが、依然として遼陽窩棚に集中し、示威に怠りなかつた。こゝに於て第七師團は之を殲滅すべく、六月十五日、黒澤大佐（源三郎、後の少將）と奥田大佐（正忠、後の少將）を支隊長とし、騎兵第二旅團の協力の下に攻撃に當らしめたが、奥田支隊の進撃少しく遅延したために、包圍して敵を襲殺するに至らなかつた。併し特筆するに足る激戦で、我軍で觀戰中の土耳其のベルテ・ベ大佐が負傷すると云ふ状況であつたのみでなく、敵が遺棄したものゝ中に蒙古地圖及び將來作戰すべき土地の重要な書類をも獲たので、裨益する處甚だ大であつたのである。

斯くて五月二十七、八日に於ける日本海々戦は、露西亞をして前途に全く光明を感じしむるものでなかつたので、六月十日、アメリカ大統領ルーズベルトの斡旋あるや、露西亞も和議を講ずることになり、九月五日、兩全權の調印を了したので、大本營は六日を以て休戰を令し、十月十四日、

和條約の御批准があつたので、各部隊は凱旋、復員することになつた。

法庫門に滯陣し、凱旋の日を將卒が待ちつゝある或日、乃木將軍は幕僚達を招待し、支那料理で文字通り歡待したが、餘りに鄭重なものであつたがために、何のための招宴であつたかゞ勢ひ問題とならざるを得なかつた。そこで河合中佐が軍副官の塚田中佐（清市、後の大佐）に、

「可怪しいぞ。君、戰時名簿を一寸見せい」

と要求した。塚田副官も河合氏と同様に「可怪しい」と考へてゐたのであらう。如何にも心外相に舌打ちでもするかのやうであつたが、

「……昨日將軍から一寸貸してくれと御持ちになつたまゝになつてをる」

と答へた。果然、河合中佐は「ほらやられた。屹度將軍の誕生日ぢやヨ」と膝を力強く叩いたが後に名簿を覗けば、推定は違はず、十一月十一日であつたので、同僚に向つて、

「暫く沈黙してゐてくれ、少し我輩に考へもあるから」

と河合氏は微笑し、頻りに點頭してゐるが、間もなく、暮僚のゐる隣の部屋にはカン／＼、ゴシゴシと云ふ建築でもするらしい音が威勢よく聞えるやうになつた。軍司令官、參謀長、各部長の宿舎は離れてゐるので、勿論、聞えないのみでなく、乃木將軍が幕僚達の部屋に訪れると一切に音がしなくなる。そして歸ると亦音が聞える。十數日——或はより以上の日——は経過したであらう。

突如として司令官、参謀長、各部長に幕僚からの招待状が到着した。

「今日は何ぢや？」

と招待に應じて来訪した將軍は、ニコ／＼しながら問ふのであつたが、河合中佐は何とも返事せず、幕僚達の部屋から離れた牒報部の部屋に案内し、用意が整つてから會場に導き、入口で、

「何卒靴を御脱ぎ下さい」

と云ふので、聊か將軍も驚いたらしく「ウム……？」と反問しようとしたが、見れば刀掛けもあり、廊下にはアンペラに縁取りがして畳を敷詰めたやうになつてをるのみでなく、室内に入れば立派に日本式の座敷である。乃木將軍も何となく異様に感じたらしいが、更に案内せられて行けば、そこは二十餘疊敷の室であり、一方は床になつて旭日に波の軸物が掛けられ、弓矢がたてられてをる。これと反対の方に立派な舞臺掛かりの設備で、その上に鏡櫃が置かれ、造花が美しく飾られてある。仰げば楣間に「祝誕辰」の額もかゝり、純然たる日本式の宴會の設け——膳椀と云ふやうなもの——が出来てをるので、入つた將軍は、

「ホホオ、これは……！」

と意外な室の様子に驚いてゐたが、如何にも眞面目くさつた河合中佐に案内されて著席すれば、参謀長、各部長も列座した。そして誰か合圖でもするやうに軽く拍手すれば、河合中佐は起ち、

「司令官閣下の御臨席の光榮を得ましたことを發起人を代表して厚く御禮を申しあげます。先般私共は御招待に接しましたが、閣下の御誕辰とも存知ませず、誠に失禮を致しました。この事を御詫びしますと共に、今日は恰も舊曆の十一月十一日に當りますので、先日の御返禮旁々閣下の御誕辰を御祝ひ申上げたいと御招き致した次第でいまするので、何卒御ゆつくり御寛ぎを願ひます」

と招待、開會の辭を叮嚀に述べれば、乃木將軍は文字通り微笑し、限りなき満悦の様子であつたが、河合中佐は更に言葉を續けて「閣下の御誕辰を御祝ひの印に私共が合唱いたします」と告げれば、主催者の参謀——井上少佐（幾太郎、後の大將）、河西大尉（惟一、後の中將）、津野田大尉（是重、後の少將）、安原大尉（啓太郎、後の少將）、貴志大尉（彌次郎、後の中將）、樋渡大尉（盛廣、後の大佐）等——は起立し、

西施楊貴妃生せた親の昔口説いたらつい落ちたのを
今じゃ露西亞の箱入娘

自慢娘の旅順じやけれど
いつか忘れて養女にいつて
落ちぬ噂が世界に高い

鐵條網の八重の關する

掩蓋深く姿も見せず

水門口から忍んで行けば
今じゃ露西亞の箱入娘

探海燈の目でおどつけ
落ちぬ噂が世界に高い

勸降書と云ふ付文見ても
頼み頼むだ白だすきさへ
今じゃ露西亞の箱入娘

けんもほろゝのすげない返事
途中まで往て追還された
落ちぬ噂が世界に高い

今じゃ露西亞の箱入娘
昔落した馴染じやものを
落ちぬなびかぬ名代の娘

落ちぬ噂がよし高いとて
今度落さや男が立たぬ
日本男子が落して見せう

戀の邪魔する黒鳩公が
此方やお先へもうお正月
落ちぬ馴染かぬ名代の娘

沙河の向うで躊躇する中
屠蘇の機嫌で口説いて見たら
又もころりといつゝ落された

と鷗外漁史——第二軍々醫部長森林太郎——の作にかゝる「箱入娘」を子供のやうに無邪氣に合唱するのであつたが、最後の「又もころりといつゝ落された」と合唱が終つた刹那、舞臺に置かれた

鎧櫃が破れ、その中から盛装した「美人」が颯つと起上つて風のやうに將軍の側に突進して来て「御酌を！」と徳利を捧げれば、それを合圖に室外に控へてゐた女装の兵卒達が如何にも淑かに進入し、頻りに酒間を斡旋するので、更に將軍は興じ、上衣さへも脱ぎ、陶然として酔ひ「婦人」達のために狂歌を揮毫して與へなどしてゐた。

こゝに少しく説明を加へねばならぬことがある。と云ふのは、この時は陣中に於て内地と違はぬやうな膳椀を使用してゐるからである。戦地に在つては、勿論、不自由なものであるが、第三軍の司令部は主將が乃木氏であるがために、殊に質素を旨とし、一切のことが文字通り儉素であつたにかゝはらず、かう云ふやうに膳椀を使用したのは大に苦心が存する。

休戦に入り、凱旋することになつてからは、十月十日、法庫門の郊外——西山——に於て第三軍の戦死病歿者の招魂祭を舉行したが、乃木將軍自ら揮毫した「第三軍戦死病歿諸將卒靈位」てふ柱は見事なものであつた。それを「焼棄てよ」と云ふ將軍の命であつたが、文字のみを削つて木材は河合中佐が貰つてあつたので、これで膳其の他を製作し、椀類は新に友軍として來た第十四師團に借りたが、その第十四師團長こそは、奉天戦に病驅を押して従軍した參謀長の松永（正敏）中將であつたのである。

◆ 記念の凱旋軍歌

休戦令せられ、平和克復すると同時に、乃木將軍は凱旋後のことに想到し、部下に向つて訓示し
誨へる處少くなかつたが、十一月には自ら作詞し、軍樂長山本銃三郎をして作曲せしめた次の
軍歌が第三軍の將卒の間に高く唱はれるやうになつた。

其 一

我が日の本の軍人
弱き敵とて侮りはせぬ
強を挫くのと知れや
弱を助ける情もござる
千歳 萬歳 萬々歳

強き敵とて何恐るべき
勝ちて驕らぬ此心こそ
強を挫くの力を持つてば
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

其 二

我が日の本の軍人
家も命も何思ふべき
五條の勅諭を唯守るなり

君と國とに捧げし身には
心は石か鐵なるか
日本魂を勅諭で磨き

其 三

日本魂で勅諭を守る
千歳 萬歳 萬々歳
我が日の本の軍人
功名手柄を無にしちやならぬ
命捨てたる其戦友の
鮮血に染めなす色とも見よ
千歳 萬歳 萬々歳

我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ
討死なせし其戦友の
國の譽も我身の幸も
骨を碎きし響と聞けよ
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

其 四

我が日の本の軍人
農工商業皆夫々に
戦するの心は同じ
和合一致の尙武の心
千歳 萬歳 萬々歳

軍役終れば故郷にかへり
正しき道に務むことは
家を富ませば國また榮ゆ
我が日の本の軍人
其名を世界に輝かせ

改めて説明を加へるまでもなく、この軍歌は戦勝にのみ酔ふことなく、平時に於ける國民の心得
を高調したもので、その精神を汲めば、流石に我が乃木將軍の心事を想ふべく、今日に於ても、尙

且つ強き或物が感ぜられる。この心掛けを忘れてはならぬと沁々かんがへられるであらう。

記述が少し横道に逸れるが、明治四十年九月五日、往年第三軍の參謀副長であつた河合大佐(操、後の大將)に寄せた乃木將軍の次の書面は、こゝに掲げた記念の凱旋軍歌と同じやうに、祖國愛を象徴するもので、マカラ一氏著「胡朔隊從軍記」の記事の一節と共に、我が國民の深く玩味すべきものであらう。

拜啓 愈々御健勝欣賀々々。マカラ一氏胡朔隊從軍記閣下讀候。實ニ快感ニ不堪候。終ニ結尾之一節ニ至リテハ所謂胸打ルル釘よりも痛く感動致し候。此一節ハ日本軍人ニ取リテハ眞ニ金玉ノ教訓、座右銘トモ可レ致程ニ覺申候。右書ハ今一應見度處も有レ之候。間今暫ク借用仕置度、尙御用之節ハ何時も返上可レ仕候間、此段御承知相願度御意得候。餘ハ拜青ニ讓如レ此候。草々不宣

九月五日

希典

河合賢臺 尊下

マカラ一氏著「胡朔隊從軍記」と云ふのは、日露戰中に露國側に從軍し、奉天會戰に黒木軍の捕虜となつた紐育ヘラルド特派員フランシス・マカラ一の著作した「With the Cossack 1906」を當時の陸軍大學校教授岡田哲藏氏が譯し、明治四十一年三月、我が陸軍大學校で刊行したのであるが、

當時河合大佐は陸軍大學校幹事であり、この「胡朔隊從軍記」に感ずる處淺くなかつたので、乃木將軍に其の草稿の一覽を乞ふた。然るに將軍は之を一讀し、果して感銘が深く、此處に掲げたやうな書面を河合大佐に寄せたのみでなく、當時の大學校長井口中將(省吾、後の大將)に其の出版を特に慫慂したが、河合大佐への書柬中の「……結尾之一節ニ至リテハ、所謂胸打ル、釘よりも痛く感動致し候」云々の一節とは、次のやうなものである。

日本陸軍ノ少壯士官ハ、兎ニ角極メテ交際シ易ク、又人ヲ疑ハザルコト恰モ英國海軍士官候補生ノ如シ。而シテ此ノ戰役中彼等ハ、幕府時代ニ成長シテ、武士的教育ヲ受ケタル、嚴格ナル長官ノ下ニ戰ヒシト雖、予ハ此ノ武士的情操ガ永久ニ日本ニ存在セントハ信ゼザルナリ。予ガ見タル所ニテモ、既ニ業ニ所謂古代ノ武士道ナルモノ、廢タレントシツ、アル兆候多カリキ。

然レドモ、世ハ滔々トシテ商人根性ニ傾キ、人ハ益々世界的トナリテ、愛國心ヲ失ヒツ、アルノ今日、日本將校ガ世界ニ與フル教訓ハ偉大ナルモノナリ。日本將校ノ俸給ハ、一ヶ月僅カニ三四十圓(三四磅)ニ過ギズ、其ノ昇進シテ聯隊長トナリ、師團長トナルコトアリトスルモ、尙其ノ收入ハ、橫濱商人ノ一笑ニ附スル所ナリ。金錢ハ日本將校ノ顧ミル處ニ非ザルナリ。

大日本帝國ノ光榮——之レ日本軍人ノ理想トスル處ニシテ、日本將校ハ此ノ理想ノ爲メニ、其ノ一生ヲ犠牲ニ供シタルナリ。若シ之ヲ哲學上ヨリ論ズレバ、或ハ左程ニ大ニ高尚ナル理想ニアラズト云フ者アランモ

何ノ理想ヲモ有セズシテ今日ノ生活ニ謙々タルニ比スレバ萬々ナリ。今ノ世、苟モ理想ノ爲ニ其ノ生命ヲ犠牲ニ供セントスルモノ、夫レ幾人カアル。

これは陸軍大學校刊行のマガラー氏著「胡朔隊從軍記」最後の第十八章「日本運送船阿波丸——日本將校」中の三〇三——四頁に記された一節であるが、見よ、更に三一一——二頁即ち「胡朔隊從軍記」の末尾には、次のやうに喝破せられてをる。今、この文字を讀むものは如何に感ずるであらう？ 乃木將軍は「……此一節ハ日本軍人ニ取りテハ、眞ニ金玉ノ教訓、座右銘トモ可致程に覺申候」と述べてをるのである。

日本兵ガ一般戰地ニ行クヲ非常ニ樂ミトナシ居レルコトハ、之即チ日本軍ノ成功ノ存スル所ニシテ、露兵ガ一向ニ不熱心ナルニ反シテ、日本兵ハ一兵卒ニ至ルマデ、戰ニ勝タントテ、殆ンド狂セル如クナリキ。然レドモ此ノ日本人ノ顯セル氣性ガ、古今ノ歴史ニ見ザル所ナリト爲スハ、大ナル誤リナリ。モントミラルノ應招兵、バンカーヒルニ戰ヒタル米兵、ネルソンノ英國水兵、一八七〇年ノ獨逸兵——此レ等ハ、皆ナ日本兵ニ勝ルトモ、決シテ劣ラザル程ニ狂セルモノナリキ。然レドモ、只ダ現今東洋ニ於ケル其ノ國ノ領地ヲ維持センガ爲メニ、其ノ本國ノ危急、存亡ニ關スル時ノ如クニ、熱心ニナリテ戰フベシト曰フハ、些サカ無理ナル注文タルヲ免カレズ。此ノ故ニ東洋ニ於テハ、歐米ハ日本ト戰フノ不利ナルモノニシテ、日本ガ其ノ勝手ノ行動ヲ爲スモ、今暫クハ之レニ反對シ能ハザルベシ。然レドモ、日本ハ戰ニ勝チテ國榮フルノ後、永久ニ今日ノ如キ精神ヲ維持シ得ベキヤ、之レ問題ナリ。

知識ハ人ヲシテ冷靜ニ考ヘシム、時ノ經ルニ從ヒ、富ノ増加スルニ從ヒ、物質的快樂ノ發展ニ伴ヒテ、日本人ノ勇氣ト其ノ大和魂ハ漸々其ノ銳キ處ヲ缺クベキナキカ。明治皇帝陛下ハ、日本歴史ニ於テ、人民ヨリ神視セラル、最後ノ天皇タルコトナクバ、幸ナリ。

◇ 熱淚裡に復命す

王師 百萬征強虜
野戰攻城屍作山
凱歌 今日幾人還
愧我何顏看父老

この詩の「王師」を「皇師」と改めたのは後日のことで、明治三十八年十二月二十九日、乃木將軍が法庫門を出發し、凱旋の途に一歩を進めた當時、賦して感慨を表はしたものは、こゝに掲げたまゝの一絶であつたのである。

凱旋！ 凱旋とは何たる華々しい辭であらう。戰場に於て赫赫の名を記録し、勝つて祖國に還ることは、想像したのみでも、猶ほ血湧き肉躍る。露西亞を亦起つ能はざるまでに屈服せしむることが出來ず、講和條件の不満足であつたにしても、「日本軍」の驕名は今や世界に噴甚するに至り、國民は心から凱旋する勇士を迎へ、その勞苦を感謝しようとしてをる。その時——旅順の攻圍戰には「英雄」であり、又更に奉天戰にはクロバトキンの心膽を寒からしめた「偉人」であつた——乃木

將軍は、謙抑して「愧我何顔看父老」と詠じ、快々として祖國に向つたのである。

法庫門から鐵嶺に到り、汽車に投じた將軍は、明治三十九年一月一日、思出多い旅順に著し、一箇年前に肉弾を投じ、精根を盡して奪取した各砲臺を巡視したが、こゝに滞在すること實に五日。翌六日に旅順を辭して大連に到り、七日大連から鎌倉丸に搭乗した。乗船後の乃木將軍は、幕僚、各部長を犒ひ、且つケビンに絶えず物思ふものゝ如くであつたが、九日の正午に「萬歳」裡の下ノ關海峡を通過し、宇品に著いたのは十日の朝であり、廣島を發したのが十二日で、新橋驛に凱旋したのは、明治三十九年一月十四日の午前十時三十九分であつた。

凱旋した諸勇士を熱烈に迎へる國民の美しい赤誠は、斷乎として甲に偏重し、乙に冷淡なるが如きことはなかつたであらう。併し當日の新橋驛は、空前の夥しい群衆であつた。乃木將軍以下の各部長並に幕僚がブラットホームに降りても、足は地上につかず、群衆の波に力強く押されて出口に進み、迎へられるものも、迎ふるものも、互に眼と眼と語るのみで、近づくを得なかつた。「萬歳！」「萬歳！」の聲を滿身に浴び、乃木將軍は幕僚等と用意の馬車を驅つて宮城に向つたが、沿道には何萬とも知れぬ人々が迎へてゐた。熱烈に迎へる市民、そして擧手の禮を黙々と返す白鬚の老將軍！ 實に一幅の繪であり、回想しても涙ぐましくなるではないか。

明治三十七年五月、第三軍司令官タルノ

大命ヲ拜シ、旅順要塞ノ攻略ニ任ジ、六月、劍山ヲ拔キ、七月、敵ノ逆襲ヲ撃退シ、次デ其前進陣地ヲ攻陥シ、鳳凰山及于大山ノ線ニ進ミ、以テ敵ヲ本防禦線内ニ壓迫シ、我海軍ノ有力ナル協同動作ト相須チテ旅順要塞ノ攻圍ヲ確實ニセリ。八月、大孤山及高崎山等ヲ陥ル。次デ強襲ヲ行ヒ、東西經龍山ノ二壘ヲ奪ヒ、爾後正攻ヲ以テ攻撃ヲ續行シ、逐次要塞ニ肉迫シ、十一月下旬ヨリ十二月月上旬ニ亘リ、二〇三高地ヲ力攻シテ遂ニ之ヲ奪取シ、港内ニ蟄伏セル敵艦ヲ撃沈セリ。既ニシテ攻撃作業ノ進捗ニ伴ヒ、其正面ノ三永久堡壘ヲ占領シ、直チニ望臺附近一帶ノ高地ニ進出シ、將ニ要塞内部ニ突入セントスルニ當リ、三十八年一月一日、敵軍降ヲ請ヒ、茲ニ攻城作戰ノ終局ヲ告ゲタリ。

時ニ北方ニ於ケル彼我兩軍ノ主力ハ、沙河附近ニ相對シ、戰機正ニ熟シ、軍ノ北進ヲ待ツコト急ナリ。因テ一月中旬、遼陽平野ニ集中シ、直チニ運動ヲ開始シテ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、全軍ノ最左翼ニ在リテ續回運動ヲ行ヒ、逐次敵ノ右翼ヲ撃破シ、奉天西北方ニ邁進シテ其退路ニ迫リ、連戰十餘日、尙敵ヲ追躡シテ心臺子、石佛寺ノ線ニ達シ、一部ヲ進メテ昌圖及金家屯附近ヲ占領セシメタリ。

五月、各軍ト相連リ、金家屯、康平ノ線ヲ占メ、尋テ敵騎大集團、我が左側背ニ來襲セシモ、之ヲ驅逐シ、茲ニ軍隊ノ整備ヲ畢リ、戰機ノ熟スルヲ待チシガ、九月中旬、休戰ノ命ヲ拜スルニ至レリ。之ヲ要スルニ本軍ノ作戰目的ヲ達スルヲ得タルハ、陛下ノ御稜威ト上級統帥ノ指導並ニ友軍ノ協力トニ頼ル。而シテ作戰十六箇月間、我將卒ノ常ニ勁敵ト健闘

シ、忠勇義烈、死ヲ視ルコト歸スルガ如ク、彈ニ斃レ、劍ニ墮ル、モノ皆
陛下ノ萬歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ、臣之ヲ伏奏セザラント欲スルモ能ハズ。然ルニ斯ノ如キ忠
勇ノ將卒ヲ以テシテ、旅順ノ攻城ニハ半歳ノ長月日ヲ要シ、多大ノ犠牲ヲ供シ、奉天附近ノ會戰ニハ、攻撃
力ノ缺乏ニ因リ、退路遮斷ノ任務ヲ全クスルニ至ラズ、又敵騎大集團ノ我ガ左側背ニ行動スルニ至リ、此ヲ
擊摧スルノ好機ヲ獲ザリシハ、臣ガ終生ノ遺憾ニシテ、恐懼措ク能ハザル所ナリ。
今ヤ
陛下ニ凱旋シ、戰況ヲ伏奏スルノ寵遇ヲ擔ヒ、恭シク部下將卒ト共ニ
天恩ノ優渥ナルヲ拜シ、顧ミテ戰死、病歿者ニ此光榮ヲ分ツ能ハザルヲ傷ム。茲ニ作戰經過概要、死傷一覽
表並ニ給與及衛生一般等ヲ具シ、謹ンデ復命ス。

明治三十九年一月十四日

第三軍司令官 男爵 乃 木 希 典

これぞ乃木將軍が大元帥陛下に拜謁を賜はり、謹で伏奏した復命書であるが、何たる力強き大
文字であらう。と同時に、何たる率直な復命書であらう。力強く復命書を捧讀しつゝあつた將軍の
聲は、何時か涙にくもつてしまつた。そして「……我將卒ノ常ニ勁敵ト健闘シ、忠勇義烈、死ヲ視
ルコト歸スルガ如ク、彈ニ斃レ、劍ニ墮ル、モノ皆陛下ノ萬歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタル

ハ、臣之ヲ伏奏セザラント欲スルモ能ハズ」と云ふ一節に至つた將軍は、終に歎歎し、御座所の
廊下に起つてゐた幕僚の眼にも熱涙が湧いた。唯だ一人も顔を得上ず、重い沈黙に塞されてしまつ
た。……再び將軍の復命書を捧讀する聲がとゞき、森嚴の裡に終了し、陛下は御嘉納あらせられた
のである。

乃木將軍の復命書！ 秋毫も功を矜持する處なく、過失を自ら牢記して闕下に謝してをるが、餘
りに率直な復命書であつたがために、幕僚の間にも「露骨に過ぎる」と意見を述べものもあつた
が、乃木將軍は此の率直な復命書を変更しようとしなかつた。而して軍部に於ても異議へと云ふよ
りも、困惑があつたのみでなく、これを公表することは面白くないであらうと云ふ反對があつ
た。併し斷乎として乃木氏は率直な復命書に改訂を加へようとしなかつた。旅順の攻圍に半歳を費
し、奉天戰に敵の退路を扼することが出來ず、又更に法庫門に敵騎の大集團を擊摧するを得なかつ
たことの三つの失敗(?)を記さずして完全な復命書を起草し得なかつたからであらう。こゝに於
て參謀本部は〇〇の伏字を多く挿入して之を發表せしめることになつた。乃木將軍の復命書が事務
的でなく、如何に眞摯なものであつたかを想ふべきである。

熱淚裡に復命を了つた乃木將軍は、優渥なる 勅語を拜し、御紋章附金時計一箇竝に御目錄一封

の恩賜を忝ふしたが、各部長以下の幕僚も俱に別室に於て拜謁を仰付けられ、且つ將軍と與に酒饌を賜はつた。宮城を斯くして退下し、參謀本部に向つた凱旋の老將軍は、自由に顔を寒風に弄らせつゝ、空洞のやうに馬車に揺られて肅々と進む、馬車の轢る轆轤の音、群集の迎へる萬歳の聲！その聲にはつと目醒めたやうに、靜かに白髯の老將軍は擧手の禮を鄭重に返しながら黙々と進むのであつた。

凱旋の日の自邸に於ける將軍と夫人の眞に劇的の涙ぐましき挨拶、更に懊惱の夜の景況は、詳細に涉つて拙著『乃木靜子』の「老將軍の握手」に記述したので、こゝには再び繰返さぬであらう。そして凱旋後の將軍が學習院の院長に任じ、又更に後に歐洲に遊んだことも亦語らぬが、次の逸話のみは叙せねばならぬ。

赤十字病院にて

明治四十三年八月二日、片瀬の夜は次第に更けて十一時も過ぎ、晝間の勞れで學生は死んだやうに熟睡してゐた。然るに突如として醫務室のドアを輕打するものがある。直ちに宿直の醫員が開けば、そこに軍服姿の乃木將軍が立つてをる。室内に請じて注目すれば、左手を以て左耳を蔽ひ、

苦痛に堪へぬらしく「今日の夕刻から頻りに騒鳴して痛む。實は明朝まで我慢する考へぢやつたが餘り疼痛を訴へて眠れぬので、夜分晩く御氣の毒ぢやが診察を願ひたい」とのことであつた。

同年七月二十一日から學習院の學生と共に、乃木將軍は相州片瀬の游泳場のテントに起居してつたが、耳疾に罹つて醫員に診てもらつた。處が症状は急性中耳炎の初期であつたので、醫員は「直ちに歸京して専門醫の治療を受けられますやうに……」と警告した。その警告に對して將軍も「さう云ふことにしよう、併し明日は是非爲さねばならぬ要件があるので、それを終り次第に歸つて治療する。今の手當で餘程好くなつた。ありがたう」とテントに引返したが、翌日備さに再診すれば決して放任せらるべきものでないので、更に醫員は「急ぎ歸京して御治療あられるやうに……」と切言した。然るに將軍は「ウム、今日の要件が終つたら左様することにしよう」と苦痛を忍び、葉山に向つて出發したが、同地の御用邸に皇太子殿下（大正天皇）の御機嫌を奉伺したのである。葉山を辭して歸京した乃木將軍は、赤十字病院を訪ふて診察を乞ふたが、症状決して樂觀を許さぬので、直ちに入院、加療するやうにと勧めたにかゝはらず、自邸に在つて手當てを加へ、入院しようとしなかつた。親戚のものや友人も頻りに懇請したが、これに耳を將軍は傾けなかつた。然るに頑張り通してゐた將軍が俄かに入院したので、聊か意外に感じたものもあつたが、聞けば「我意を通さず、大任を荷へる身體なることを考慮し、入院 加療せよ」とて電報が山縣公からとゞい

たゝめであつたといふ。こゝに乃木將軍の百日近い病院生活は始まつたのである。

赤十字病院に入つた乃木將軍は、同月十日、病院長平井軍醫總監(政道)、副院長鶴田軍醫監(禎次郎)、ドクトル山上主幹(兼輔)、賀古軍醫監(鶴所)、岡田帝大教授(和一郎)等對診の上で鼓膜の穿開術を受けて排膿し、疼痛も大に減退したが、穿孔聊か狭小であつたがために、十四日を以て擴開し、比較的排膿も多量であつたにかゝはらず、乳嘴突起化膿の症状益々加はり、十六日には脈五十至に減じ、左頂部に握痛があつて頭痛増し、腦壓迫徵候があるので、全身麻酔の下に、左乳嘴突起鑿孔術を行ひ、骨片を除き、蜂窩内の蓄膿を排泄して消毒繃帯をなし、この大手術も二十五分間で終つたが、爲に疼痛も減じ、憂慮せられてゐた腦膜炎其の他生命に危険を及ぼすやうな範圍を脱したので、近親者も知己も漸く安堵するに至つたのである。

當時の新聞紙は「乃木將軍の症状頗に悪化し、危篤に陥る」とさへ報道したが、事實に於て左様でなかつたにしても、生命に對する危険の伴ふ状態に瀕し、乃木氏を熟知すると否にかゝはらず憂慮せしめたが、手術後は症状も一日と佳良になつた。そして輕快すると共に、將軍は其の鬱懷を詩や和歌に託したが、

臥病安閑三閱月
玻璃窓外風多少

不關人生幾波瀾
落葉無聲秋雨寒

著者曰く「臥病」を「臥褥」或は「臥床」としたものがあつた、又「三閱月」を「五十日」としたのもある。

と云ふ如何にも詩人らしい作がある。少しく批評がましくなるが、三閱月も病臥して淋しい秋雨を玻璃窓から悵然と眺めてゐる病人の狀が彷彿し、病院生活を文字通り描寫したものと云ふとが感ぜられるかと思へば、

盛名功業世皆欽
榮辱死生機一髮

千古誰全道義心
可憐勇士就生擒

と云ふ豪快なものもあり、乃木氏の面目を窺ふべきものであるが「還曆の翌年障子つき破り」てふ意味淺からざる狂歌があり、これに賀古鶴所氏は「春はむかしに立ち回へりけり」と和してをるのも興味の多いことではなればならぬ。

赤十字病院では、増築中の病室その他の建物落成を告げ、且つ諸般の設備殆んど整頓したので、皇后(後の昭憲皇太后陛下)の行啓を仰ぎ、台覽の榮をたまはるることになり、陛下は明治四十三年十一月十七日午後一時五分御出門、同四十分御著遊ばされ、平井院長御先導、階上御便殿へ御案内申上げたが、御著の際に皇后宮太夫の香川伯(敬三)から特に平井院長に「乃木には御謁見

を賜はるから……」との御内意があつたので、その事が將軍に即刻傳へられた。

さう云ふことを豫期せぬ將軍は「病體であるから……」と齋戒し、羽織、袴をつけて、病床に於て遙拜することにしたが、御内意を院長から傳へられて恐懼し、東病棟五の側第二號室の副室板の間の廊下に面した入口の右に將軍、その背後三步左に靜子夫人が起立し、陛下の通御を恭しく御待ち申しあげてゐた。

平井院長の御先導で陛下は東病棟から順次玉歩を運ばせられたが、乃木將軍の病室の前に御近づきになると共に、數歩前に前行してゐた香川伯を追越させ給ふやうに速歩を以て御進み遊ばされ、乃木將軍夫妻に最も御懇に「いかゞですか」との御會釋があつたのみでなく、將軍に對しては「大切な身體であるから特に自愛せよ」と云ふ有難い御言葉があり、靜子夫人には「長々の看病で疲労したことであらうが、尙此の上大切にせよ」との御言葉さへあつたと仄聞する。餘り御長い御謁見であらせられるので、御先導の平井院長が恐悚して陛下の方を振返つたが、猶ほ御去りにならうとも遊ばされなかつた。そして御見舞料として金幣竝に御菓子を下賜せられたが、當日の大なる感激を次のやうに將軍は表はしてをる。

いたつきは我おこたりのとがなれば

大みめぐみになにとこたへん

そして御下賜の金幣と御菓子とを平井院長その他に「恩賜を頌つ」意味に於て將軍は頌つたのであるが、この入院中に各宮殿下から御見舞として下賜せられた草花に對しても、

たまはりの花のかずく夏をあした

秋のゆふべも色さやかにて

と云ふ感激を以て表現してをるのも、乃木氏の面目を想はしむるものであるが、矢張り入院中に賦詠したものに、

枕上刀三尺 壯心今尙在

病餘衰弱甚 何以報二天恩一

と云ふ一律がある。「何以報二天恩」と詠じたのは、蓋し將軍の心意氣を想見すべきものではなからうか。明治天皇の御信任、そして皇后陛下の御仁慈……と想起するのみでも、私共は猶ほ感懐に堪へぬのである。

……と記述するのみでも、私は感激を禁ずることが出来ぬ。況んや當日の我が將軍に於てをやである。この小著に至靈を傾けて従事した私は、かう云ふ佳話と感激を以て擱筆する。

予の許諾なく本書中より脚色、上映、翻譯、轉載を禁す。——著者——

昭和十二年九月五日増補第一刷印刷
昭和十二年九月拾日増補第一刷發行

補増

乃木希典

〔定價〕一圓八十錢

版 權 所 有

著 者
發 行 者
印 刷 者
印 刷 所

東京市赤坂區青山南町六ノ一
宿 利 重 一
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
神 田 龍 一
東京市牛込區矢來町卅六
本 間 十 三 郎
東京市牛込區矢來町卅六
清 揚 社

(所本製林・本製)

發 行 所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

春

秋

社

發 賣 所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

株式會社

松

柏

館

振替東京三九七一六 電話日本橋二六二四

頁〇六四判六四
葉八眞寫
錢十八圓一價定

著一重利宿・湖冬

補 增 子 靜 木 乃

河合大將推獎

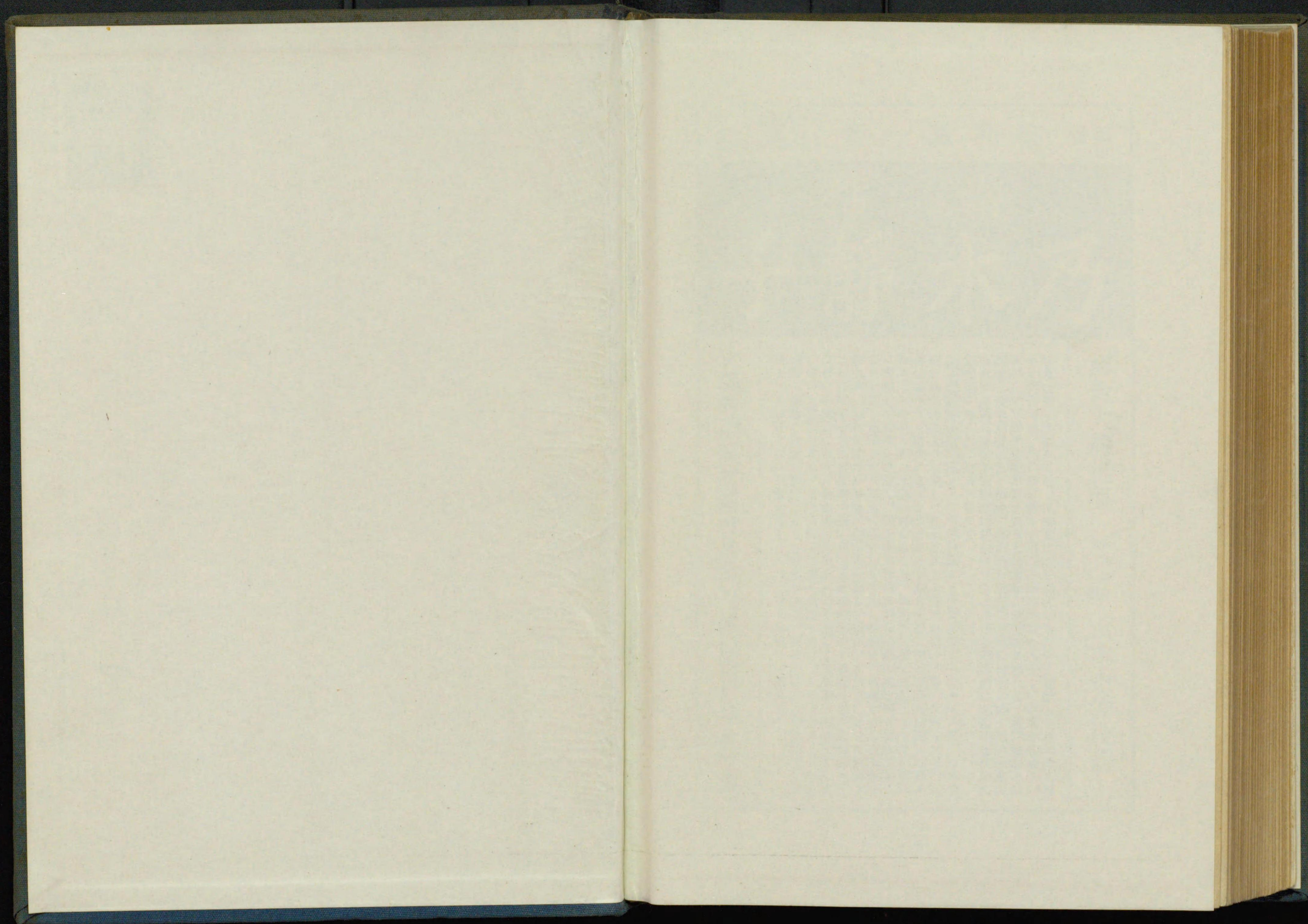
乃木將軍
甥

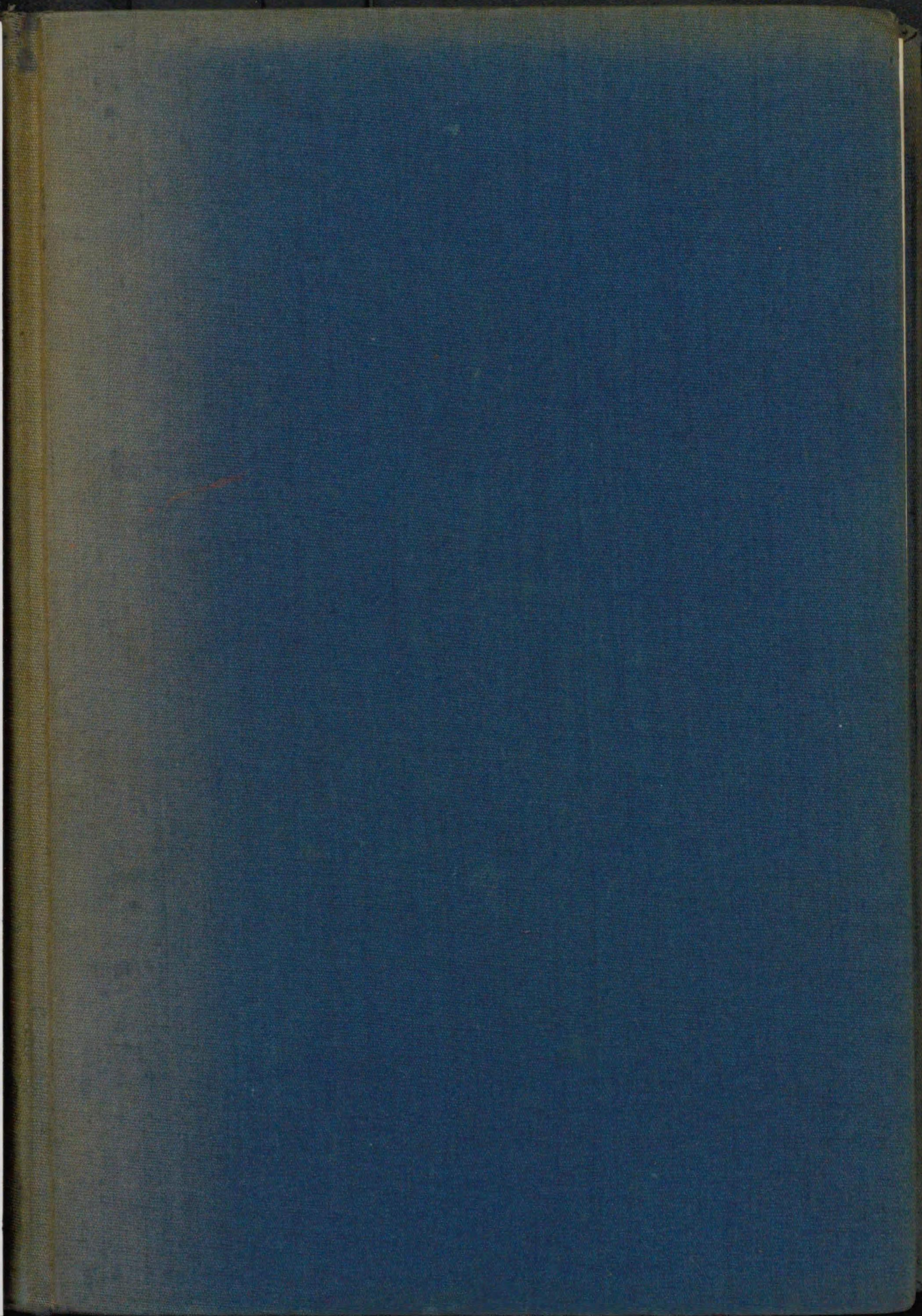
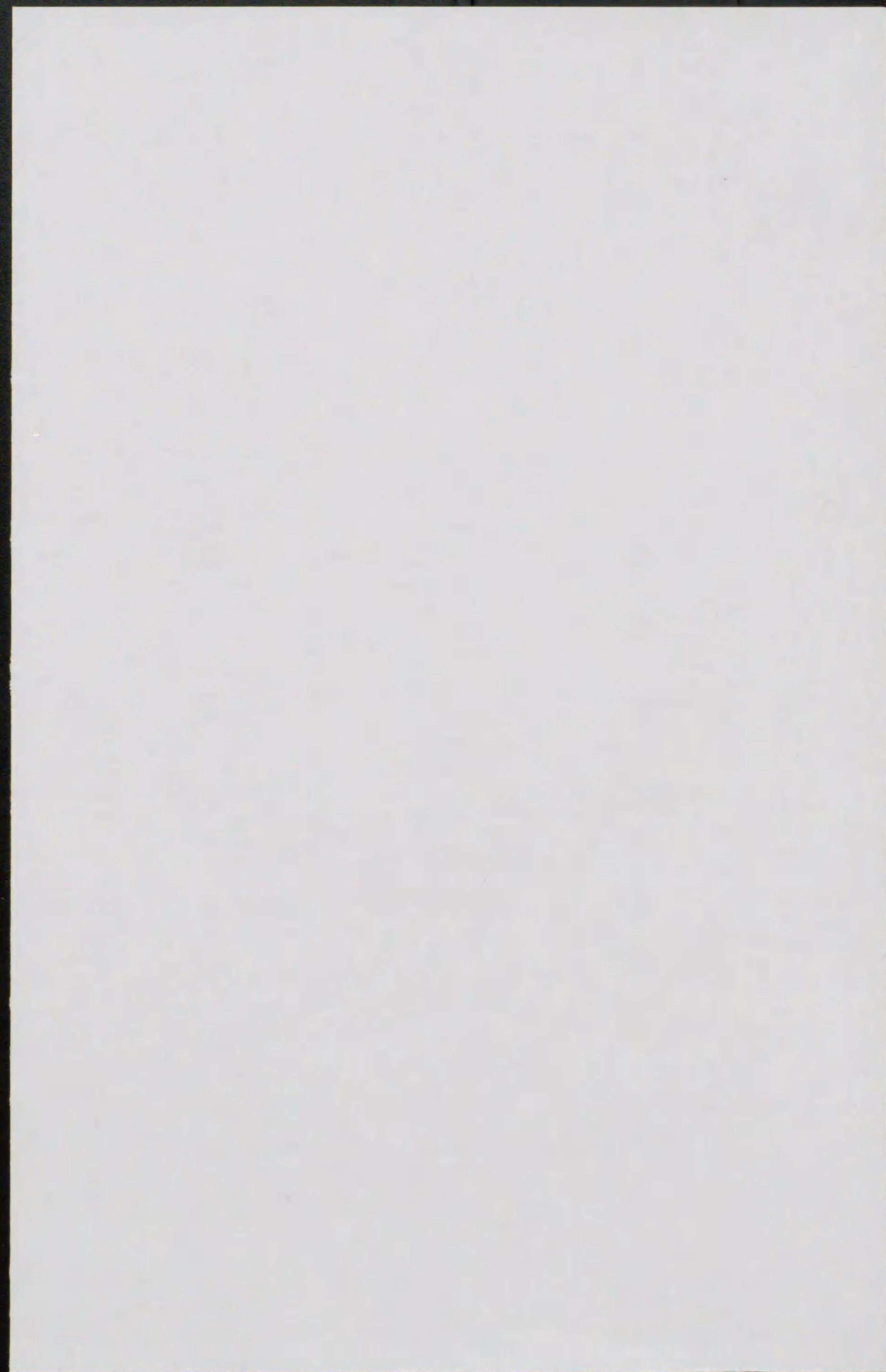
玉木中佐校閱

著者は將軍夫妻自刃後、長年月に互り非常なる苦心と忍耐とを以て夫人側より材料を得、更に將軍側より門外不出の材料を入手して本篇を完成す、殊に(一)乃木將軍が靜子夫人と結婚せし當時の日記(二)長男勝典の生誕せし時の日記(三)勝典、保典戦死の際の將軍の日記(四)乃木將軍夫妻自刃に際し當時の警視廳醫員の責任ある將軍夫妻死體檢案書の全文の公表等を本會に於て始めて發表す。

徳富蘇峯先生曰く、大將に關する著書は多きにかゝはらず、乃木伯爵夫人に係るものは少く、偶々之あるも信憑し難い。斯るは夫人が深く家庭に潜みて、社交に遠ざかつたためであらうが、決して夫人は厨櫃に營々たりしのみならず、大將の内助者たり、兩典の教養に精進した跡は、端的に宿利君の著に躍動し、輕佻浮薄の婦人界に衣服の清涼劑を提供するものと云ふを妨げない。順境に人となつた夫人が嚴格、複雑なりし乃木家に嫁入り、辛楚を嘗めた母堂に仕へて苦惱し、遂に別居するに至つた始末とこれに對する大將の苦衷、而して夫人が飄然悟つて母堂の膝下に復歸し、没自我的生活に入り、晩年終に母堂を一靜子無くして寂寥一を感ぜしむるに至つた徑路を叙し、更に凱旋の日周人環視の裡に、大將自ら夫人の手を緊握、感謝の赤誠を捧げしめたる光景を描き、兩典出征並に戦死の際の大將と夫人の伴りなき胸懷を記したるは、蓋し本書中の壓巻たり。

文部省認定、茗溪會推獎、日本圖書館協會推薦



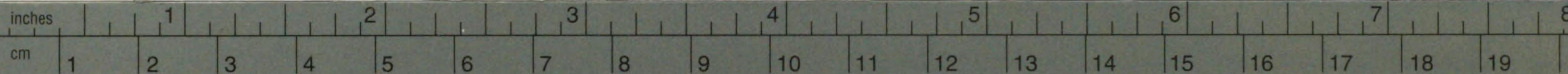


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

